宮尾横穴群

第２集

―― 第２次調査報告書 ――

1992年3月

島根町教育委員会

序

本横穴群は一昨年、急傾斜地崩壊対策工事に先立つ発掘調査により、その全容の一端が明らかになりました。

今回は前回の調査区域に隣接する工事区域をひき続いて発掘調査したものです。いわば第２次調査ということになります。その結果、量、質ともに予想をはるかに上回る資料が得られ、本横穴群は、少くとも島根半島では随一、島根県下でも最大クラスの横穴群であることが判明しました。あくまでも住民の生命、安全を第一とする立場から、やむなく記録保存に留める結果とはなりましたが、ここに成果を公表し、今後の本町さらに島根半島全域の古代史解明および文化財の保護と活用に資することを期したいものです。

終わりに、本調査に対し格別のご援助とご協力をいただいた島根県教育委員会文化課、島根県松江土木建築事務所、その他関係各位に対し深甚な謝意を表する次第でございます。

平成４年３月

島根町教育委員会

教育長　伊　達　　章

例　　言

1．本書は、島根町大芦、小具地区急傾斜地崩壊対策工事に伴い、島根町教育委員会が島根県松江土木建築事務所から委託を受けて実施した宮尾横穴群発掘調査第２次調査の報告書です。

2．調査の組織は次のとおりです。

調査主体	島根町教育委員会		
調査指導	島根県文化財保護審議会会長		山本　清
	鹿島町立鹿島中学校教諭		石井　悠
	島根県教育委員会文化課主事		丹羽野　裕
調査担当	松江教育事務所派遣社会教育主事		宍道正年
事務局	島根町教育委員会	教育長	伊達　章
	〃	教育次長	余村　滋
	〃	主任	湯原　章

3．発掘調査に関して㈲小谷工務店、槙原石材店、大芦小学校と山崎武春、石川勝己、石川勝美、小田武晴の各氏から多大の援助を得ました。記して謝意を表します。

4．遺物の実測、写真撮影には宍道があたり、特に土器の実測については島根大学学生の物部茂樹、守岡正司、野田直子、大坂理恵と本町在住の宮本守人氏の各氏協力を得ました。

5．遺物の整理および図面の浄写は奥村美佐子、金津須賀子、田中恵、小原明美各氏の協力を得ました。

6．本書の執筆は宍道があたり、編集は宍道が湯原と協議して行いました。
　なお第Ｉ章の「小具地区急傾斜地崩壊対策工事について」は、松江土木建築事務所からのご寄稿です。

7．表紙の題字は島根町教育委員会教育長伊達章によります。

目　　次

Ⅰ　はじめに …… 1

小貝地区急傾斜崩壊対策工事について
島根町の縄文時代～奈良時代の略年表

Ⅱ　遺跡のあらまし …… 5

調査に至る経緯、遺跡の位置

Ⅲ　横穴とは　～意味とその時期 …… 8

横穴とは、横穴の時期、第２次調査区域内の地形測量図、
第２次調査区域内の横穴配置図

Ⅳ　調査のあらまし …… 17

調査の方法、Ｃ－７号穴、Ｃ－８号穴、Ｃ－９号穴
Ｃ－10号穴、Ｃ－11号穴、Ｃ－12号穴、Ｃ－13号穴、Ｃ－14号穴
Ｃ－15号穴、Ｃ－16号穴、Ｃ－17号穴、Ｃ－18号穴、Ｃ－19号穴
Ｃ－20号穴、Ｃ－21号穴、Ｃ－22号穴、Ｃ－23号穴
前年度第１次調査のあらまし …… 126
宮尾横穴群配置図 …… 127
土器型式からみた宮尾横穴群の築造時期と使用（追葬）時期 …… 129
未調査区域について …… 131

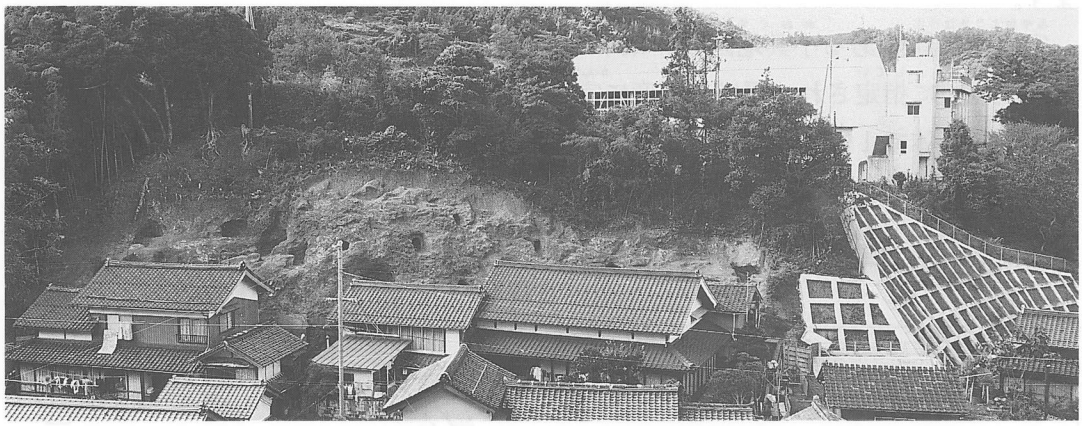
Ⅴ　ま　と　め …… 132

宮尾横穴群一覧、横穴のつくられた時期と使用された期間、横穴の時期
ごとにつくられた数、等高線ぞいに並んだ横穴群配置図、横穴の羨門の
正面図・羨門の横断面図

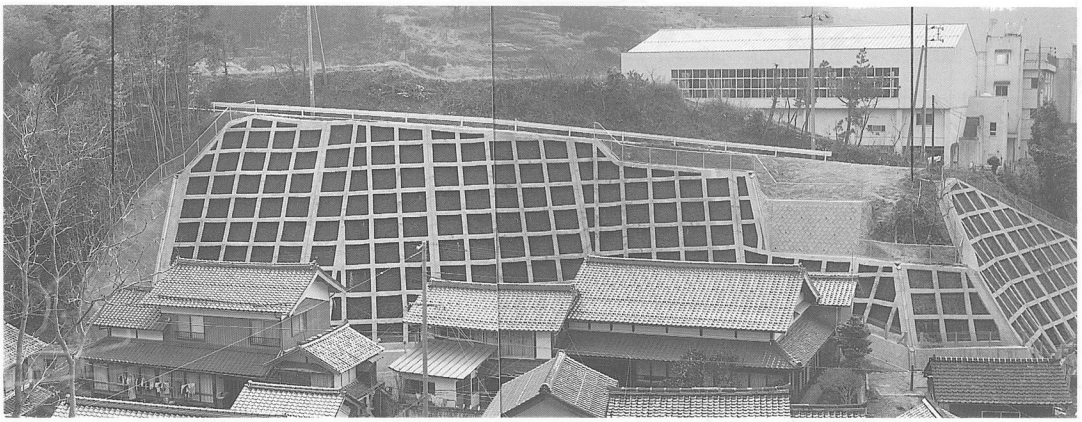
宮尾横穴群発掘調査第２次調査報告書

Ⅰ．はじめに

上の写真をごらん下さい。平成２年度の第２次調査が終了し、防護壁の工事にとりかかる前の状態です。それが工事の結果、下の写真のように立派な防護壁が出来上がり、がけくずれの心配がなくなりました。平成元年度と２年度の２度にわたる発掘調査は、横穴群が工事区域内に含まれていたからでした。



急傾斜地危険区域の中にある宮尾横穴群遠景
（右端は平成元年度防止工事終了区域、右上方の建物は大芦小学校）



急傾斜地危険区域として平成２年度の防止工事が完了した小具地区
（中央の防護壁部分が今回の第２次発掘調査区域、右端の防護壁部分は前回の第１次発掘調査区域）

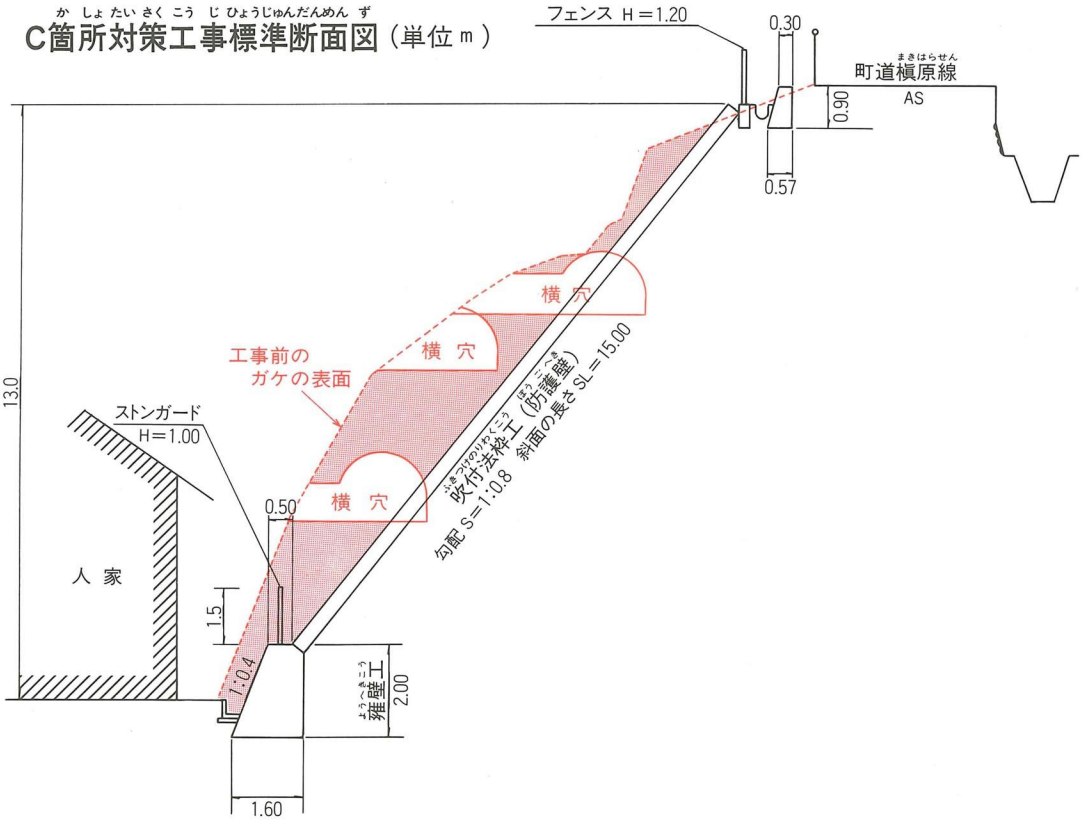
小具地区急傾斜地崩壊対策工事について

雨や地震などにより、急な斜面が突然くずれ落ちることを、がけ崩れといいます。「がけ」のすぐそばに家があると、小さながけ崩れでも死者も出るような悲惨な災害となる危険性があります。昭和58年梅雨末期に県西部を襲った集中豪雨では、大小のかげ崩れによる土砂災害が775箇所発生し、1,448戸の家屋が被害を受け、87名もの死者が出るという大災害となりました。

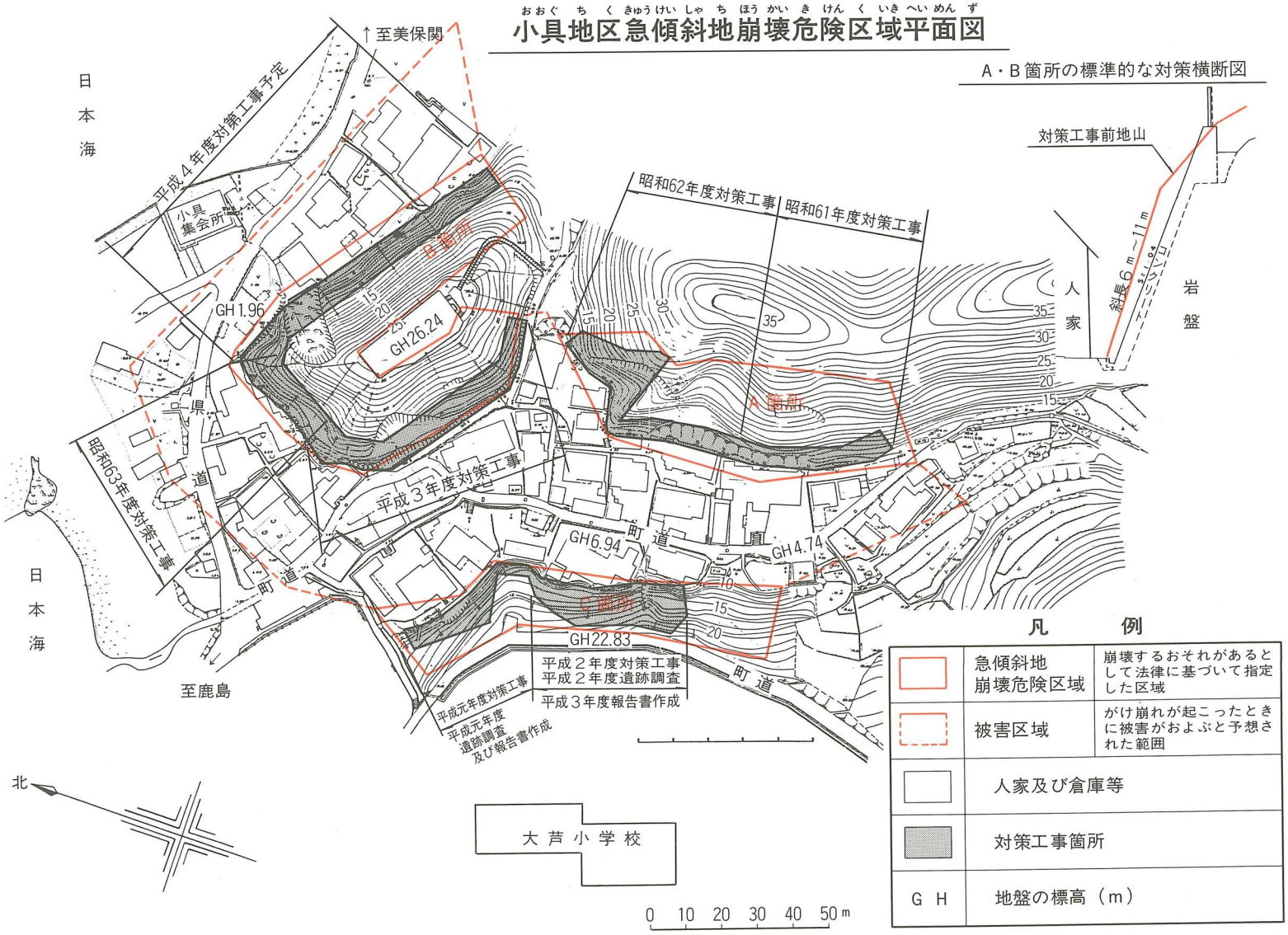
このような災害が起こることのないよう、国と県は市町村及び住民と協力し、がけ崩れの発生する恐れがある箇所を、斜面の高さや守べき人家戸数などの基準を満たしている箇所を「急傾斜地危険区域」に指定し、がけ崩れを防ぐための工事を進めています。

宮尾横穴群のある小具地区は、昭和61年度に、遺跡の周辺を含めて「急傾斜地危険区域」に指定され、平成４年度に完了を目標に崩壊防止対策を進めております。この間に全体で１億５千万円の工事費がかかり、このうち約6,800万円が遺跡箇所の工事に使われました。

C箇所対策工事標準断面図（単位ｍ）



小具地区急傾斜地崩壊危険区域平面図



島根町の縄文時代～奈良時代までの略年表

年代	時代	人々のくらしやできごと
	先土器時代	＊ 多古の七ツ穴遺跡という説もある。
今から約１万年前	縄文時代 （島根町内の縄文時代の遺跡は未発見）	＊ 土器を作り始める ＊ 人々は狩りや漁で生活し、貝塚などを残した。
今から約2300年前 紀元１年 100年 200年	弥生時代 （島根町内で弥生時代の遺跡は未発見）	＊ 大陸から稲作りが伝わる ＊ 弥生土器が作られる ＊ 鉄器や青銅器が使われ始める。 斐川町の荒神谷遺跡に358本の銅剣、銅矛、銅鐸が埋められる ＊ 邪馬台国の卑弥呼、魏（中国）に使いを遣る
300年 400年 500年 600年 700年	古墳時代 （島根町内では今のところ５世紀の古墳から始まる） 奈良時代 （加賀と大芦は島根郡加賀郷に野波は千酌駅に属す）	＊ 島根県内でも大型の古墳が盛んに造られ始める。 ＊ 大和王権を中心とする政治的なまとまりがつくられる ＊ 出雲地方で須恵器の生産が始まる ＊ 加賀の牛谷古墳と天神山古墳がつくられる ＊ このころから横穴墓が多く造られ始める 538 仏教が伝わる 593 聖徳太子、摂政になる ＊ このころ大芦の宮尾横穴群や野波の亀田横穴群の横穴墓がつくられる 645 大化の改新 710 平城京に都を移す 733 出雲国風土記ができる

Ⅱ．遺跡のあらまし

調査に至たる経緯

宮尾横穴群は島根県八束郡島根町大字大芦の小具地区内にあります。大芦小学校のある丘陵の南東側斜面のすそに位置します。昭和48年に島根県教育委員会の分布調査により確認された周知の遺跡です。

この小具地区の全域を取り囲む丘陵地は昭和60年に島根県から「急傾斜地崩壊危険区域」として指定を受けました。そこで４年後の平成元年、対策工事に先立ち、工事区域内の発掘調査が実施されました。その結果、大小20穴の横穴が確認され、多数の副葬品が出土しました。そして調査後、工事は着手され翌年３月に完成しました。

今回は平成元年度調査区の南の隣接した工事区域内の発掘調査です。前回と同じように平成２年４月１日、松江土木建築事務所からの依頼を受け、島根町教育委員会の手で実施しました。いわば前回に続く第２次調査の形です。

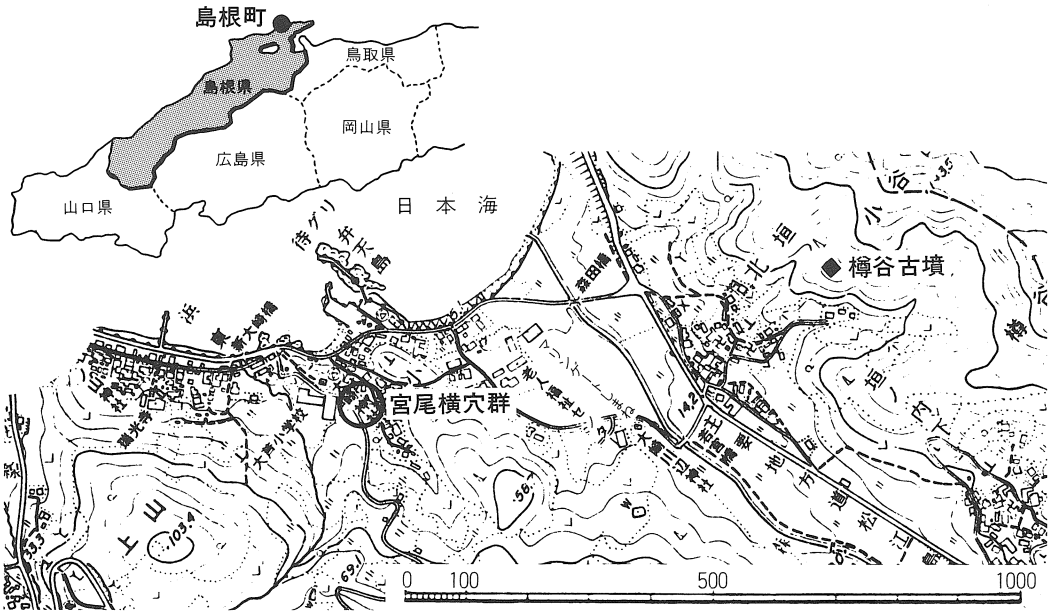
海からの遠景（平成元年度発掘前）

遺跡の位置

本横穴群の存在する島根町は、島根半島の北側、日本海に面した位置に当たります。出雲国風土記に記載の大埼濱（現在の大芦海岸）から南へ約100ｍ入り込んだ狭い谷

の西～南斜面（標高約５～20m）に本横穴群が掘られています。
国指定名勝天然記念物潜戸からは南西へ直線距離にして約2500mの地点です。海岸のほぼ中央部に突き出る丘陵のすそに位置し、海辺に密集する家並越しに日本海を見晴らす一等地です。地籍の上では、八束郡島根町大字大芦字小具2100番地とその他10か所の番地にまたがるかなりの広さ（約13アール）の急傾斜地をほぼ遺跡の範囲とします。なお、本横穴群の北側には、出雲国風土記に記された大埼社（現在の大崎神社）、西側には島根町立大芦小学校があります。

また、本横穴群から東へ小さな丘陵１つ越すと、主要地方道松江島根線沿いに、細長く比較的広い水田が開けています。そして、その東側丘陵の中腹部には、あたかも水田地帯をはさんで本横穴群と向かい合う形で、樽谷古墳があります。築造時期も本横穴群と重なる可能性が高く、千年以上も昔の地域の歴史を明らかにしていく上で興味が持たれます。



遺跡の位置と周辺の地形

島根町内の主な遺跡

現在までに町内の周知の遺跡は14か所を数えます。大芦、加賀、野波３地区各々に分布しています。古墳が中心で、縄文・弥生時代の遺跡は未発見です。以下、主なものを簡単に紹介します。

大芦地区には宮尾横穴群（図－１）のほかに、箱形石棺を墳丘の中に納めた樽谷古

墳（2）がよく知られています。その築造時期は古墳時代後期（6～7世紀）と考えられます。

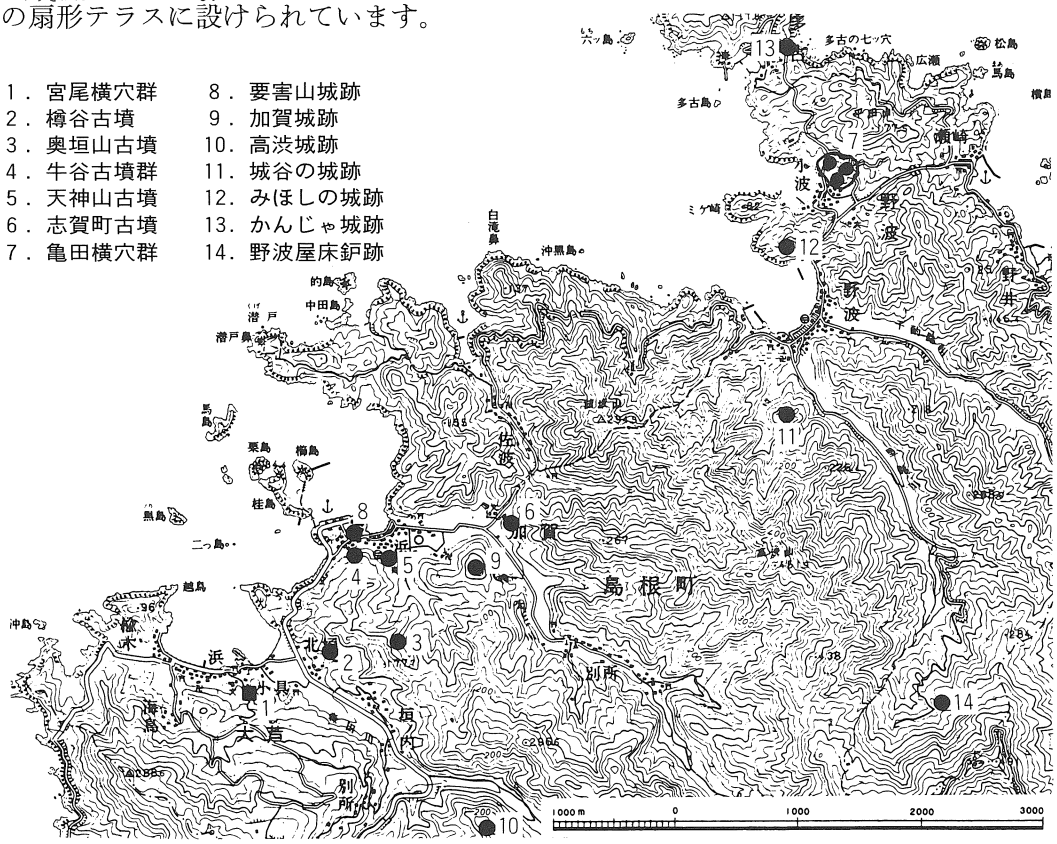
加賀地区には4基の古墳があります。後期の疑似石棺式石室を備えた奥垣山古墳（3）、中期（5世紀）の長持形石棺あるいは舟形石棺の特徴をまねた2つの箱形の石棺を持つ牛谷古墳（4）、同じく中期型箱形石棺2つを持つ天神山古墳（5）、そして6世紀後半（Ⅳ期）の蓋坏が出土した疑似石棺式石棺の志賀町古墳（6）です。

野波地区では墳丘の古墳はあまりはっきりしていません。3つの支群から構成された亀田横穴群（7）があります。平成3年秋に8穴のうち1穴が発掘調査されましたが、実際にはもっと多くの横穴が埋もれている可能性が高いです。

中世戦国時代の尼子氏と毛利氏攻防に関係した城跡は町内に6か所あります。加賀地区には要害山城跡（8）と加賀城跡（9）、大芦地区には高渋城跡（10）、大城（平）山城跡、そして野波地区には城谷の城跡、みほしの城跡、かんじゃ城跡があります。

なお、野波地区には山陰海岸部で初めて発見された中世の野だたら遺構を持つ野波屋床鈩跡があります。標高約250mの丘陵中腹に位置し、急斜面を切り開いた約0.5haの扇形テラスに設けられています。

1．宮尾横穴群
2．樽谷古墳
3．奥垣山古墳
4．牛谷古墳群
5．天神山古墳
6．志賀町古墳
7．亀田横穴群
8．要害山城跡
9．加賀城跡
10．高渋城跡
11．城谷の城跡
12．みほしの城跡
13．かんじゃ城跡
14．野波屋床鈩跡



島根町内の遺跡分布図

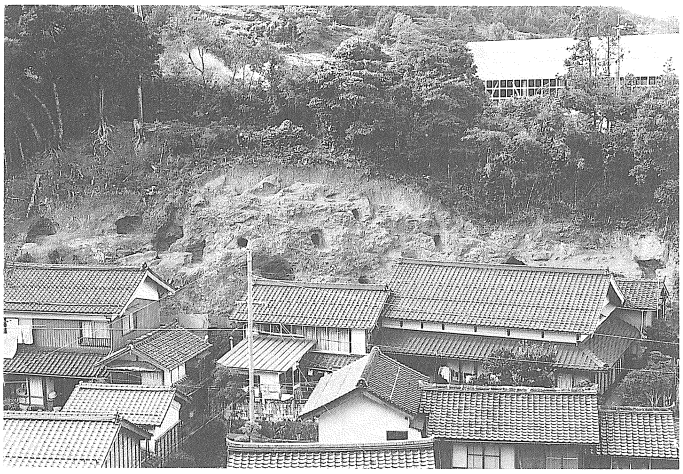
Ⅲ．横穴とは ～意味とその時期～

横　穴　と　は

「横穴」とは「横穴墓」あるいは「横穴古墳」とも言われるように、大昔の墓です。形が家によく似ているため「横穴式住居」というふうに誤解されるむきもありますが、決して「住居」ではなく「墓」です。今から約1400年位前（6世紀後半～7世紀末）、古墳時代とか大和時代あるは飛鳥時代と日本史の中で呼ばれている時代につくられた墓です。要するに「古墳」の一種です。古墳には「土まんじゅう形」の墳丘をもつものばかりでなく、横穴のように、山の斜面に直接遺体を納める部屋を掘り込むものもあるのです。

横穴はふつう当時のムラの中で、中流ないしそれ以上の有力者層の「家族墓」と考えられています。（現在とちがってそのころは階級社会ですから、横穴がつくれない人々もいました。）横穴の入口の扉をはずしさえすれば何度も遺体の安置ができます。だいたい平均3回位使っているそうです。現に今回調査した宮尾横穴群でも数回使用した例が明らかになりました。最初に穴を掘ってから、その後約100年の間に血のつながりのある人物を何人も中に葬っています。

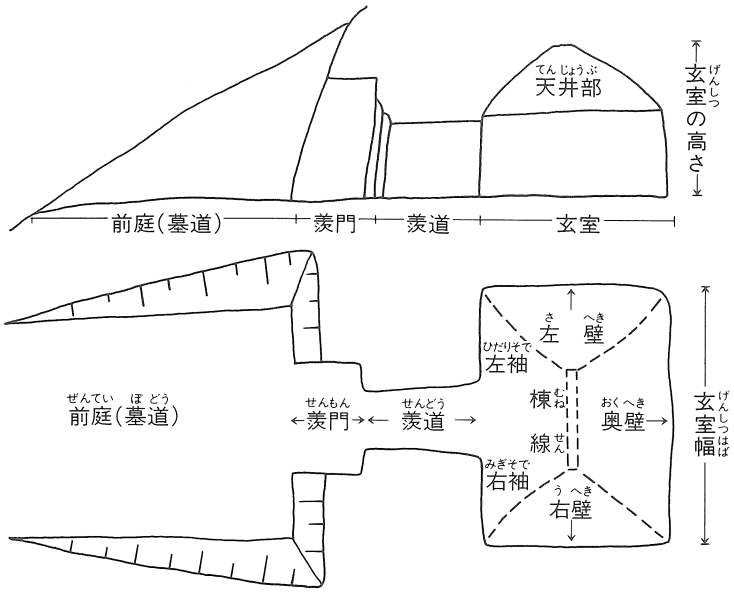
横穴はふつう一か所に数穴ないし数十穴もまとまって、群をなしたようなかっこうで掘られています。ですから「○○横穴群」という呼び方になります。ここ宮尾の場合もそうですから、宮尾横穴群です。昨年度の発掘調査で二十穴そして今年度十七穴、合計三十七穴も確認できました。まだ調査してない部分を含めると五十穴はあると思われます。発掘後、遠くからは、まるでハチの巣あるいは4階建アパート（各横穴が各室）のように見えます。今日的な言い方をすれば、共同墓地、集団墓地です。今の墓地の多くがそうであるように、集落や平野とか海、川を見おろすながめのよい小高い場所に横穴群がつくられています。



宮尾横穴群第2次調査区全景

宮尾の場合は日本海が見晴らせる標高５～20ｍの絶好の場所です。そして、山肌に直接穴を掘るのですから、その土質が適していることも条件です。掘りやすく、同時にくずれにくい岩質、土質の所を選んでおります。ここ宮尾の場合、周囲の丘陵と全く異なった岩質「石英安山岩質凝灰岩」という横穴群を掘るのに都合のよい、ほどほどに柔かくて加工しやすく、それでいてくずれにくいものです。周辺一帯の丘陵は砂岩と頁岩の互層からできていますが、ここだけは局部的に掘りやすい土質になっています。古代人はそれに目をつけて横穴群の場所を選んだのでしょう。

日本海が見晴らせる宮尾横穴群



横穴模式図と各部位名称(『奥山遺跡発掘調査報告書』より)

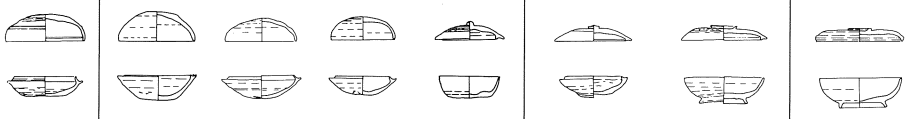
次に横穴の構造についてふれます。まず、最も手前には、「前庭」という墓道があります。奥の墓に通じるテラスみたいなものです。ここでは「墓前祭」というような

儀式をします。「羨門」は入口にあたります。ここに扉をします。閉塞用の石を積み上げたりします。「羨道」はその奥の「玄室」につながるトンネルです。「玄室」は遺体を横たえる部屋です。横穴の中心部になります。その天井は家形や丸天井形あるいはテント形など様々です。玄室の床には遺体を納めた時にお供えした各種の遺物（副葬品）が並んでいます。ここ宮尾の横穴からも、大刀、玉、イヤリング、土器などたくさん見つかりました。

横穴の時期

―― 土器が物差し ――

横穴がいつごろ掘られて、使い始められ、そしていつごろまで、少くとも何回葬られてきたか（2回目以降を「追葬」と言う）――これを知る手がかりは、その横穴から出土した副葬品の土器です。特に、有効なのは須恵器という土器の「蓋坏」という器種です。例えば女性のスカートが、時代の流れによってミニからロングと変わっていくように、この蓋坏（蓋の付いた茶碗のような食器）は、次のように時期が下るごとに変化していきます。

時期	Ⅲ期	Ⅳ期						
型	B	A	B-1	B-2	C	D	E	F
図								
世紀	六世紀後半	7世紀前半				7世紀後半		
		七世紀前半		七世紀半ば			七世紀後半	七世紀末
実年代（西暦）	600年							700年
	←	約150年間						→

1．Ⅲ期　山陰地方の蓋坏はⅠ期（5世紀末、今から約1500年前）からⅡ、Ⅲ、Ⅳ期（7世紀）というように大まかに4つの時期に分かれます。宮尾横穴群の場合は、こ

のうちⅠ期とⅡ期のものはなくて、Ⅲ期のB型（6世紀後半、今から約1400年前）からあります。Ⅲ期の特徴は、器面に「ヘラ削り」というていねいな仕上げの方法をしている点です。

2．ⅣA型　ここからⅣ期に入ります。坏部の受部（蓋を受ける部分）の立ち上がりがⅢ期に比べ低くなり、「ヘラ削り」の手法はなくなります。A型は次のB－1型に比べ大形です。B－1型と時間の隔りはないようです。AとB－1型は7世紀前半と考えてよいでしょう。

3．ⅣB－1型　A型に比べやや小形です。

4．ⅣB－2型　B－1型に比べ一層小さくなります。次のC型と変わらぬほど小形化します。B－1型とは時間的に区分してもよいでしょう。C型とは分けないほうがいいでしょう。B－2型とC型は大きくは7世紀前半、そして細かくは7世紀半ばごろの時期とします。

5．ⅣC型　B－2型とほぼ同じ形ですが、蓋に乳頭状の小さな「つまみ」がつきます。

6．ⅣD型　蓋に宝珠状の「つまみ」がつきます。このD型から7世紀後半にする分け方もありますが、B－2型、C型と合わせて7世紀半ばとする考えもあります。C型に比べやや大形化したように思われます。一応、C型より少し新しいタイプと考えます。坏はA～C型まで底には「高台」がなかったのに、この型から高台付きとなるようです。

7．Ⅳ-E型　「輪状つまみ」がつくようになります。坏の「高台」もあります。7世紀後半のタイプです。

8．Ⅳ-F型　一見、E型と見分けがつきませんが、蓋の内側が異なります。E型には口縁内側に「かえり」が付きますが、このF型は、折れ曲がっただけで、「かえり」がありません。E型より新しく7世紀もいよいよ終わりの時期です。

このように、土器の蓋坏を「時間の物差し」としてタイプ分けしました。これによって、それぞれの横穴の時期について説明することにします。

横穴古墳を見に行って

大芦小六年　北野恭子（やす）

今日（十一月一日）の業間に、宮尾横穴群を見に行きました。

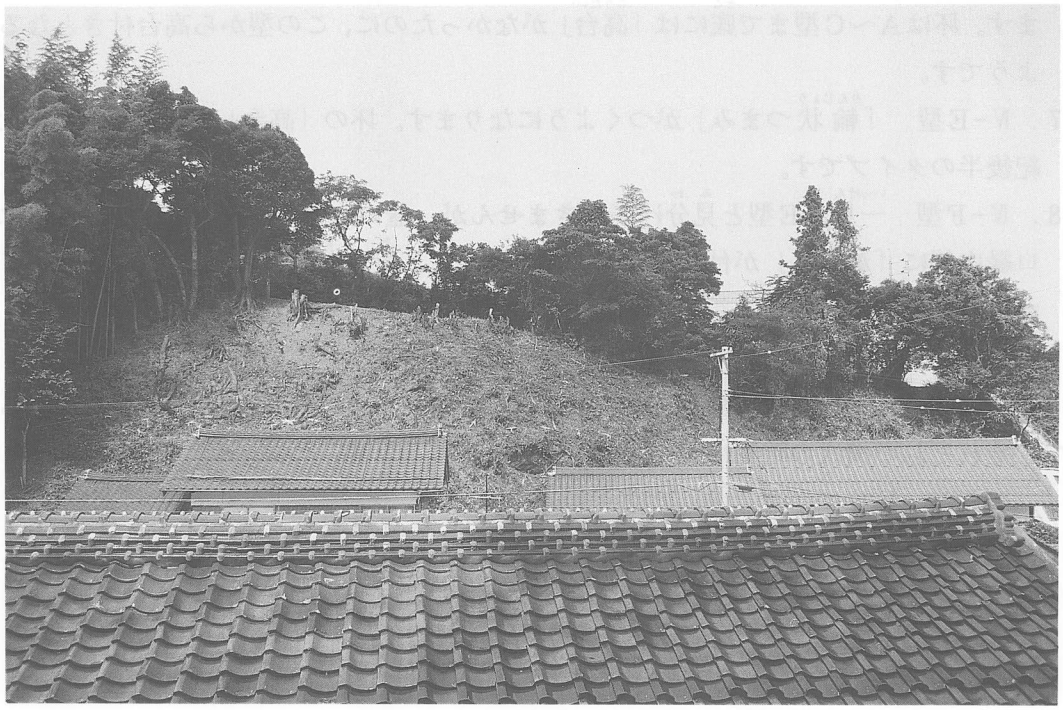
私の予そうでは、横穴の数は五つぐらいでしたが、行ってみたらたくさんありました。今年発くつされた横穴は十七で、昨年のと合わせると三十七の横穴群になることがわかりました。三十七という数を聞いた時、

「うっそう。」

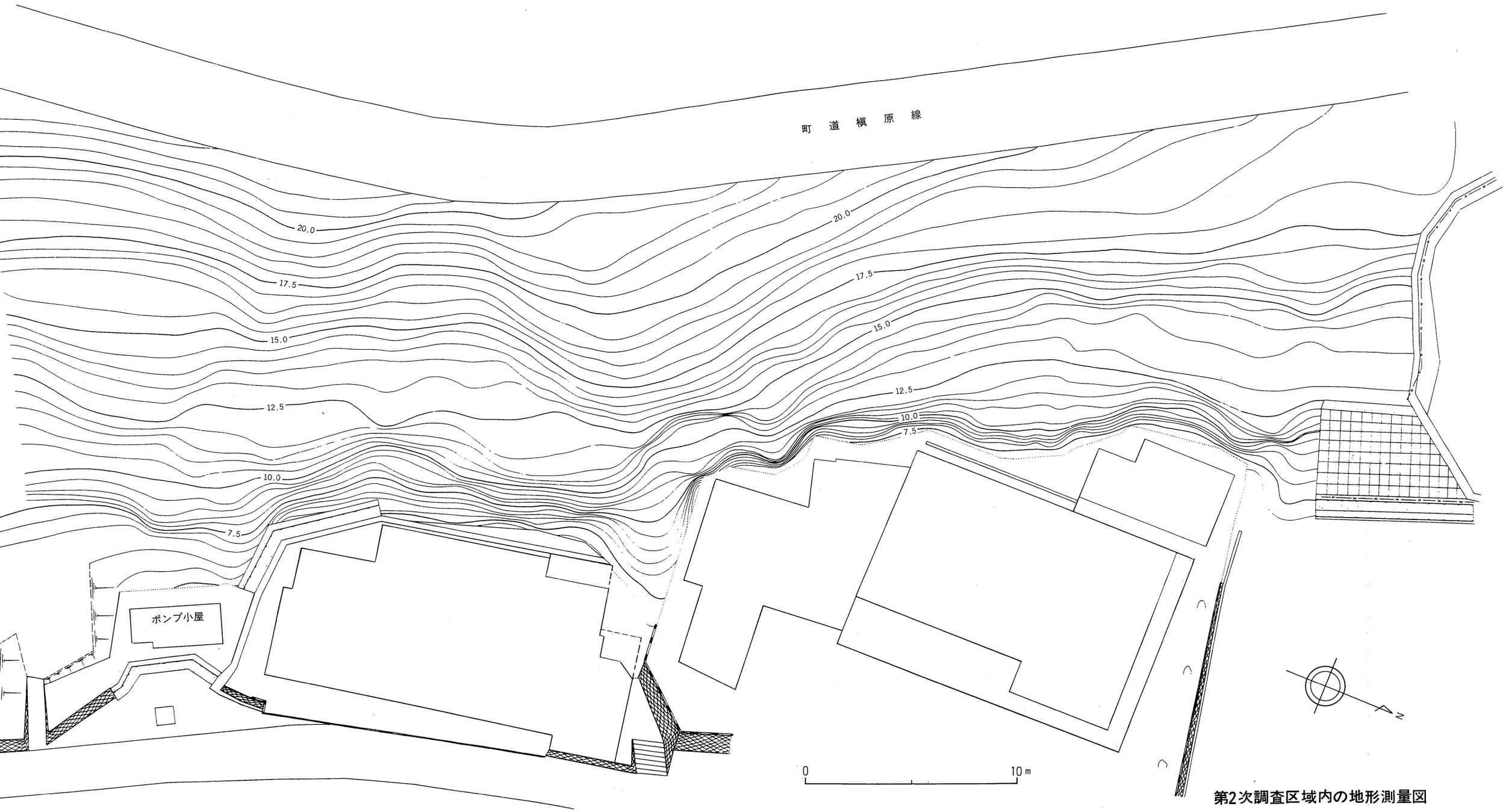
と声を出して言ってしまうほどびっくりしました。それに、まだ発くつしてない竹林の中にも、まだまだあると言われたので、またまたびっくり、という感じでした。また、雅巳君の家の近くにこんな大きな横穴群があったなんて、全ぜん知らなかったし、こんなたくさんの数の横穴からできた横穴群は、島根県内で指をおって数えるくらいしかない、と聞いた時は、もう、びっくりもいいとこでした。

中に入ってみると、石のまくらがある横穴や子供を入れる所のついた横穴もあって、とっても興味深かったです。そして部屋の大きさから、昔の人の身長もわかって勉強になりました。

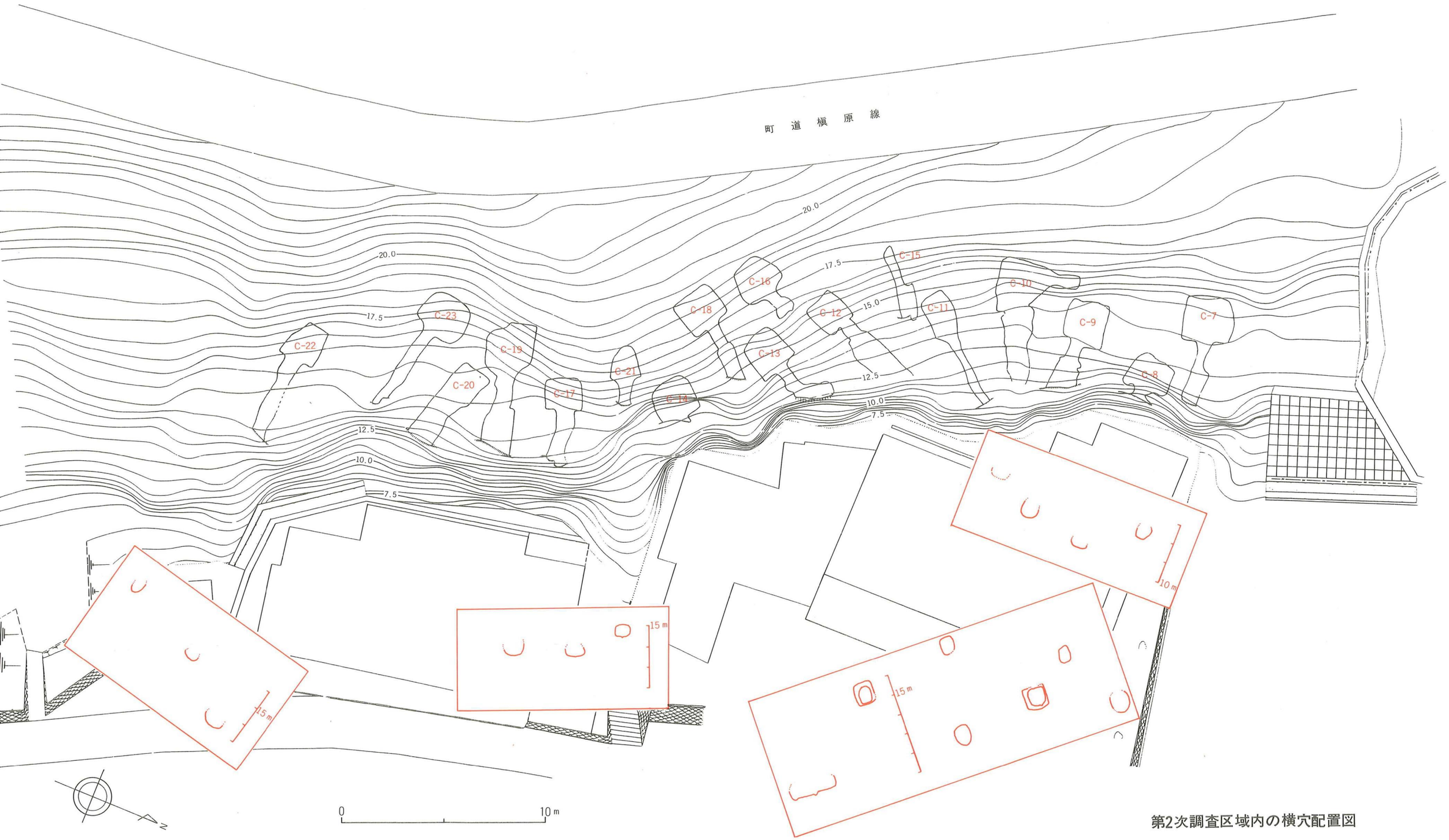
今日の古墳見学は、びっくり、びっくりのしっぱなしだったけれど、とってもいい勉強になりました。



第２次発掘調査前の遠景（中央のくぼみはＣ-14号穴）



第2次調査区域内の地形測量図



第2次調査区域内の横穴配置図

Ⅳ．調査のあらまし

調査の方法

宮尾横穴群は、北～東を向いた高さ５～20ｍくらいの急な斜面に、３～４段の階段状の「数珠つなぎ」のようにつくられています。ここに横穴群があることはずいぶん前から知られていました。崖下や斜面の途中で、開口した横穴と遺物が発見されていました。

昨年度の第１次調査は平成元年６月14日から10月21日までの実働33日をかけて、丘陵斜面のおよそ西半分が対象でした。西側からＡ区、Ｂ区、Ｃ区と分けて発掘調査が行われ、Ａ区で11穴、Ｂ区で３穴、Ｃ区で６穴の計20穴が確認されました。

今年度の第２次調査は、そのＣ区の続きで、宮尾の丘陵斜面のほぼ中央部から東半分に当たる広い範囲（約10ｍ×約50ｍ）でした。平成２年７月４日から10月31日までの実働95日もの長期間を要し、合計17穴の横穴を検出しました。前年度のＣ区ではＣ-６号穴まで見つかっていましたので、今回はＣ-７号、Ｃ-８号穴というように番号をつけました。したがってＣ-７号穴からＣ-23号穴を調査したことになります。

地形測量作業

まず調査対象地の写真撮影や地形測量（縮尺1/100，50cmコンタ）を行い、全体の地形をつかみます。次に丘陵斜面に沿って縦方向に幅２ｍの短ザク形トレンチ（試掘溝）を全域に設定します。東西約54ｍの斜面に27本のトレンチを設けました。

1,400年も経つと、地表面の状態が非常に変化しております。横穴が厚さ約20cm～200cmの土砂に埋もれてしまい、全くその姿が見えません。はたして表土の下に存在しているのかどうか見当がつきにくい状況でした。正直なところ、第２次調査区には、それほど多くの横穴はないだろうという予想をしていました。

ところが、各々のトレンチを荒掘りし、表面の堆積土をとり除いて、斜面全体をは

炎天下の荒掘り作業

ぎとったところ、出るは出るは。予想に反して17穴も。いかに事前の表面観察が頼りにならないかを痛感しました。掘ってみて初めてわかるものです。

なお、斜面上方の道路に近い部分は、安全性を考えて発掘をしませんでした。

7月5日からの荒掘りはクワとスコップを使う荒仕事です。ブルドーザなど機械を使ったら横穴を見つけるどころか、逆にこわすことになりかねません。炎天下で、しかも雑木や竹の根に邪魔されるつらい作業でした。実働13日かけ7月21日に終わりました。

荒掘りの結果、横穴の存在箇所を見つけますと、次は1穴ずつ順番に手掘りで精査します。横穴の中軸線と思われる部分に幅10cmのアゼを残し、土層を観察しながら進めます。クワとスコップが移植ゴテにかわり、竹ベラやハケで慎重に調べていく段階になります。ちょっと油断すると掘りすぎたり、遺物をこわしたりします。

1つの横穴を元のままの状態にまで掘り上げますと、きれいに遺構や遺物をそうじして出土状況を写真撮影し、さらに1/20の縮尺で図面（平面図、正面図、断面図）にとります。この作業にけっこう時間を要します。おまけに羨門に扉石などがありますと、約2倍の労力と時間を要します。（扉石の状況を図面化しないと、石がとりはずせませんから。）今回はそうした手間をとる閉塞施設の横穴が15穴もあったのです。調査期間が相当延びたのは、1つにはこの扉石の横穴が続出していたことにもよります。実測作業は炎天や雨風の日でもやりますし、まっ暗なしかも狭い玄室の中で、かい中電灯のあかりだけを頼りに方眼紙に向かう仕事なので、ずいぶん骨が折れました。なお実測の基準とした標高は工事用のものを使用しました。

では、調査の順序にしたがってC-7号穴から述べていきます。

移植ゴテや竹ベラで慎重に精査

C－7号穴

玄室（遺体を納める部屋）と羨道（玄室に通じるトンネル部分）の天井部は落盤していました。玄室はおよそ2畳の広さです。天井がなくなっているので多少わかりにくいのですが、やや簡略化した家の形につくっています。「便化家形」という形です。床面の中央と四方の壁に沿って排水用の溝が掘ってあるため、あたかも玄室床面に左右2つの棺台（遺体を置くベッド状のもの）が設けられているようです。そして各々の棺台には遺体の頭をのせる枕石のような石が置かれ、その近くには、蓋杯や甕など須恵器が供えてありました。蓋杯のタイプはⅣAとⅣDの2種類あります。ⅣAの時期（7世紀前半）にこの横穴は掘られ、その後何度か追葬（入口の扉を取り除いて何度も遺体を入れる）し、最終的にはⅣDの時期（7世紀後半）に使い終わった、ということが言えます。

注目すべきは、この横穴の閉塞状況です。羨門（羨道の入口）だけでなく羨道全体にわたって、びっしりと大小73個もの多量の石で積み上げ、石と石のすき間やその表面を茶褐色粘土でつきかためたようにしています。追葬の最終回には既に羨門の天井がなくなっていたにもかかわらず、石を積み上げて閉塞したことがわかります。石は山の石ではなく、角が磨かれて丸くなった「海石」です。おそらく近くの海岸から運んだのでしょう。なお、羨道の床面に浅い穴が3つあるのは、おそらく一番下の石を安定させるため掘ったものでしょう。

前庭は玄室の主軸方向に対し左へ約20度ずれています。

C－7号穴観察表　（単位：m）

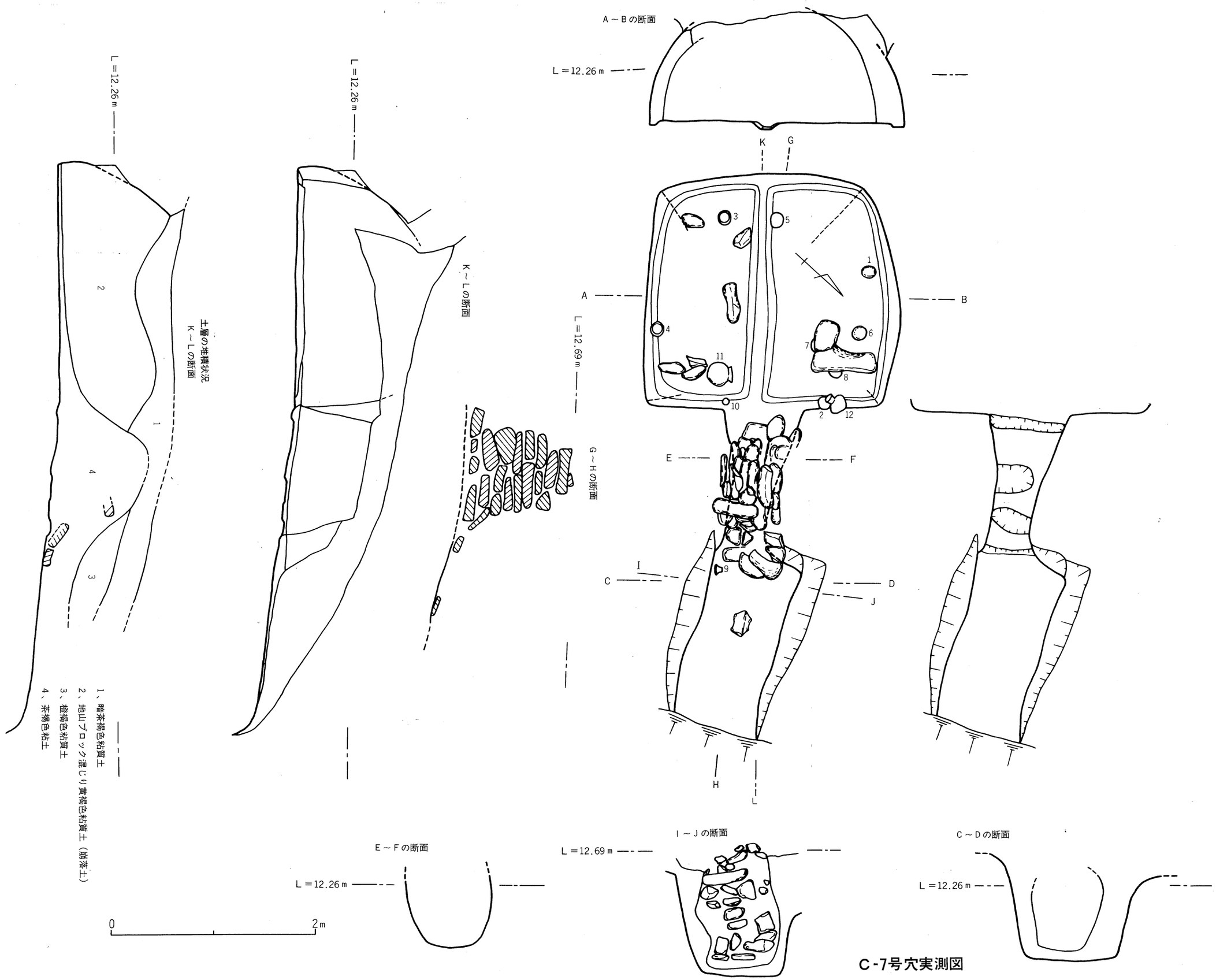
玄室	標高（床面）	平均 11.80	奥行	2.30	奥幅	1.98	前幅	2.28	最大幅	2.52	高さ	不明	
	平面形	ほぼ正方形			天井の形態	便化家形			型式	妻入り			
	埋葬施設	左側	枕石、棺台状		右側	枕石、棺台状			奥	不明			
羨道	長さ	1.40	奥幅	0.68	前幅	0.45	高さ	不明	横断面の形	鶏卵形か			
閉塞施設	石材	大小の自然石73個で、ほぼ羨道全体にびっしり積み上げている。								繰込有無	不明		
前庭部	長さ	1.80					幅	0.80					
排水溝	玄室の中央と四方の壁に沿っている。羨道には続かない。												
その他	羨門に段差がついている。前庭は玄室の中心線より左へ約20度ずれている。												

C-7号穴

1　横穴の入口(羨道部)に積み上げた扉石(閉塞用石積み)の状況〈前庭から見たところ〉

2　扉石の石の積み上げ方を上から見たところ
(左側は玄室、右側は前庭部)

3　玄室の中の遺物出土状況を上から見たこころ(左側は羨道)


A～Bの断面
L＝12.26ｍ
K
G
A
B
L＝12.69ｍ
E
F
C
D
I
J
H
L
G～Hの断面
K～Lの断面
L＝12.26ｍ
土層の堆積状況
K～Lの断面
1、暗茶褐色粘質土
2、地山ブロック混じり黒褐色粘質土（崩落土）
3、橙褐色粘質土
4、茶褐色粘土
E～Fの断面
I～Jの断面
C～Dの断面
0
2ｍ

C-7号穴実測図

遺物出土位置

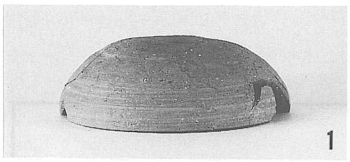
玄　室	坏蓋４個、坏身４個、脚付坏１個、平瓶１個、甕１個
羨　道	なし
前　庭	高坏（脚部のみ）１個
その他	

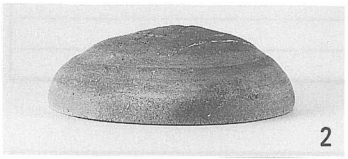
築造時期および追葬

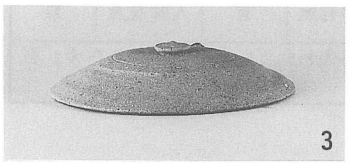
築造年代	古墳時代後期（７世紀後半）	須恵器型式	Ⅳ期（A・D）	追葬有無	有	人骨有無	無
備　考	玄室と羨道の天井が落盤。追葬の最終回には、羨門部の天井が失われているにもかかわらず、石材で羨道全体を閉塞している。						

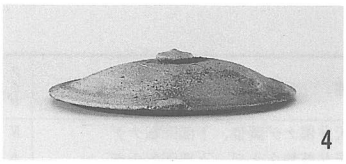
C－７号穴出土遺物観察表

番号	取り上げ番号	器種	寸法（cm） 口径	胴径	底径	器高	胎土	焼成	色調	備考	タイプ
1	No. 28	坏蓋	12.0			3.9	細砂を多く含む	良好	青灰色	外面－天井部ナデ調整、下部回転ナデ 内面－天井部静止ナデ、下部回転ナデ	Ⅳ A
2	No. 33	〃	12.3			4.1	〃	〃	〃	内面天井部に二条のヘラ記号 外面－天井部ヘラ切り後ナデ調整、下部回転ナデ 内面－天井部静止ナデ、下部回転ナデ	Ⅳ A
3	No. 26	〃	13.3	(かえり部) 11.1		2.8	密 細砂を含む	〃	黄灰色	外面－天井部回転ヘラ削り、下部回転ナデ 宝珠状つまみを有す 内面－天井部静止ナデ、下部回転ナデ	Ⅳ D
4	No. 36	〃	13.6	(かえり部) 11.2		2.7	〃	〃	〃	外面－天井部回転ヘラ削り、下部回転ナデ 宝珠状つまみを有す 内面－天井部静止ナデ、下部回転ナデ	Ⅳ D
5	No. 27	坏身	12.8	(受部) 10.1		3.5	〃	〃	灰色 黒灰色	外面－上部回転ナデ、底部ナデ調整 内面－上部回転ナデ、底部静止ナデ	Ⅳ A
6	No. 30	〃	13.9	(〃) 11.5		3.9	〃	〃	青灰色	外面－上部回転ナデ、底部ヘラ切り後、ナデ調整、焼成前についたクシ状のキズ有り 内面－底部静止ナデ、上部回転ナデ	Ⅳ A
7	No. 29	〃	13.6	(〃) 11.2		4.3	〃	〃	灰色 暗茶褐色	外面－底部ヘラ切りの後ナデ調整 内面－底部静止ナデ、体側部回転ナデ	Ⅳ A
8	No. 31	〃	13.1	(受部) 10.7		3.9	密 細砂を多く含む	〃	青灰色	内面底部に一条のヘラ記号 外面－底部はヘラ切りの後ナデ調整、上部回転ナデ 内面－底部静止ナデ、上部回転ナデ	Ⅳ A
9	No. 24	高坏	不明		(脚) 9.8	不明	密	〃	〃	すかしは１段。２方向から切り込みを入れただけのもの。 全面－回転ナデ	
10	No. 34	脚付坏	9.4		(〃) 4.9	5.2	密 細砂を多く含む	〃	〃	外面－回転ナデ 内面－坏部底に静止ナデ	Ⅳ
11	No. 35	甕	17.7	26.4		27.5	〃	〃	明灰色 淡灰色	外面－口縁部横ナデ調整、肩部から底部までタタキ目，部分的に横ナデ 内面－口縁部横ナデ調整、頸部から底部までタタキ目	
12	No. 32	平瓶	8.3	17.1		19.1	〃	〃	〃	外面－口縁部から頸部にかけて回転ナデ、肩部から胴部はカキ目調整、底部ヘラ削り、自然釉を有す 内面－全面回転ナデ	


1

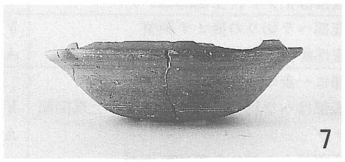

2


3

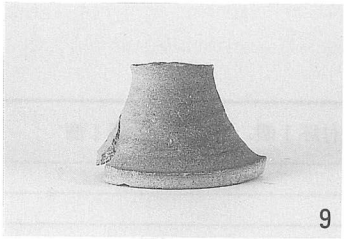

4

5

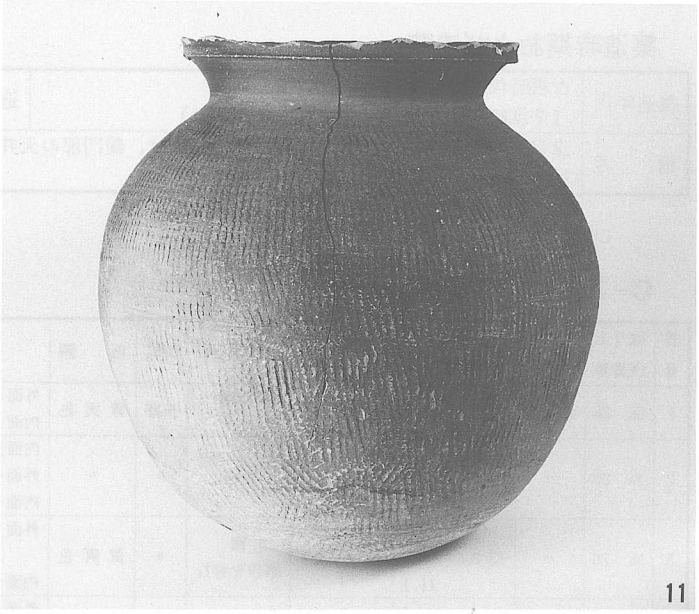
6


7

8

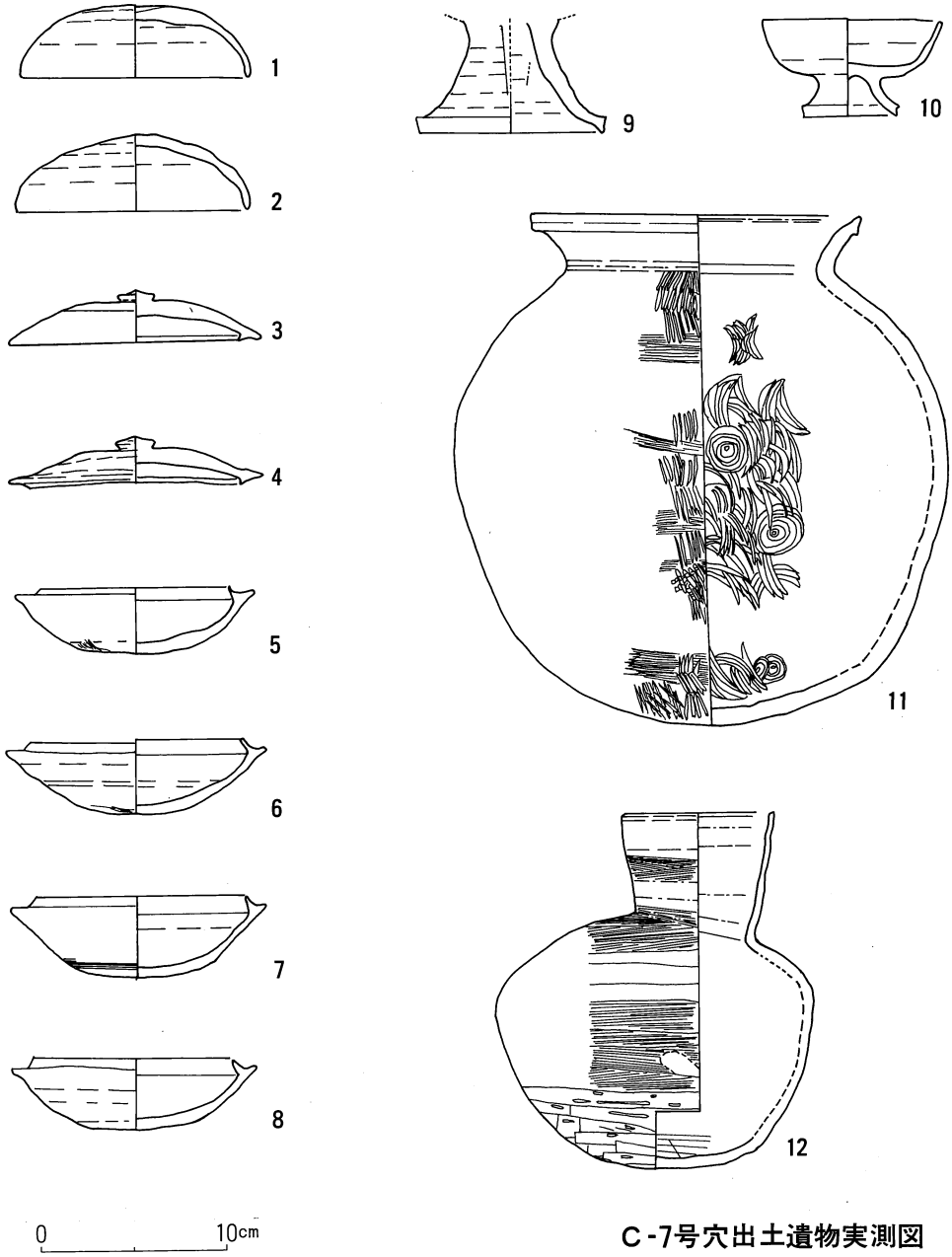

9

10


11

12

C-7号穴出土遺物



C-7号穴出土遺物実測図

C－8号穴

C－7号穴の南隣りにありました。玄室と羨道の天井はすべて落盤しており、羨道部の床面の一部もかろうじて残っている状態でした。玄室の床面から約60センチ上に厚 15～20センチの木炭や赤色の焼土を含む土層が全体にひろがっていました。おそらく後の世の人がこの横穴を使って何かしていたのでしょう。幸いその木炭・焼土層の下は全くいじられていなかったため、床面や床面に近い高さから土器が13個出土しました。

このC－8号穴はC－7号穴と同じ形式の「便化家形」です。今回の第2次調査で見つかった17穴の横穴の中では最も古い時期につくられたものです。6世紀後半に始り、その後、7世紀前半まで何度か追葬されています。玄室の床面は平らになっていませんが、枕石に使ったような石や土器がまとまった感じにおかれています。羨道の奥部に石が2個だけありますが、おそらく扉石の一部だと思います。

C－8号穴観察表

（単位：m）

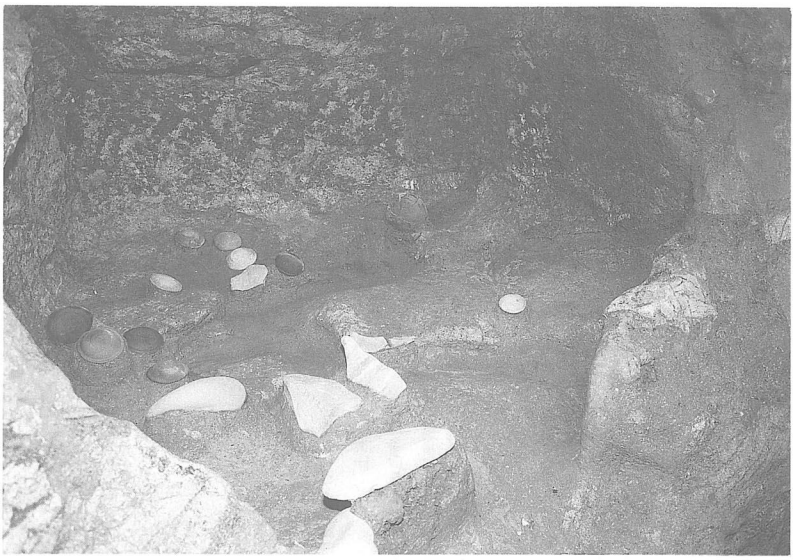
玄室	標高（床面）	平均 10.20	奥行	1.60	奥幅	1.72	前幅	2.10	最大幅	2.10	高さ	不明	
	平面形	長方形			天井の形態	便化家形			型式	平入り			
	埋葬施設	左側			右側				奥				
羨道	長さ	不明	奥幅	0.62	前幅	不明	高さ	不明	横断面の形	底面はU字形			
閉塞施設	石材	自然石で閉塞したと思われる。2個だけ遺存。								繰込有無	不明		
前庭部	長さ	不明					幅	不明					
排水溝	無												
その他													

遺物出土位置

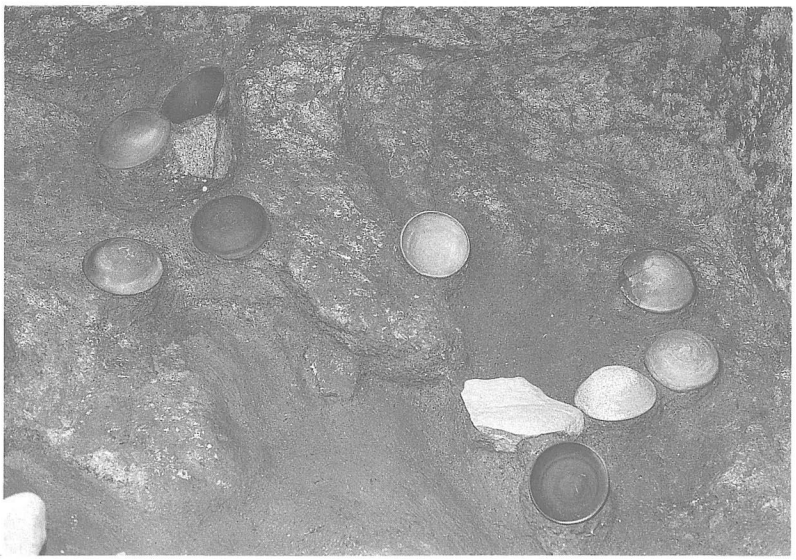
玄室	坏蓋5個、坏身5個、高坏2個、甕1個
羨道	不明
前庭	不明
その他	

C-8号穴

1　中央がC-8号穴、その左どなりがC-9号穴、右どなりがC-7号穴。C-7号穴の右側は前年度発掘調査区域（地すべりの防護壁が発掘調査後に取りつけられた）



2　C-8号穴の入口から玄室を見たところ（天井は落盤のためなくなっている）



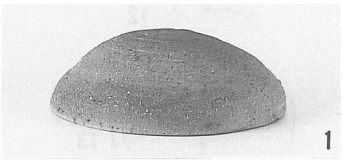
3　玄室床面の遺物出土状況

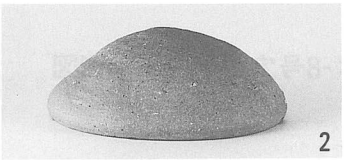
A～Bの断面
L＝10.76m
C～Dの断面
L＝10.76m
1、地山ブロック
2、地山微細ブロック混じり褐色土
3、茶褐色粘土
4、木炭と赤色の焼土混じり暗黒褐色土
5、地山微細ブロック混じり茶褐色粘質土
6、地山微細ブロック混じり淡茶褐色粘質土
土層の堆積状況
C～Dの断面
L＝10.76m
E～Fの断面
L＝10.76m
A
B
C
D
E
F
0
2m

C-8号穴実測図

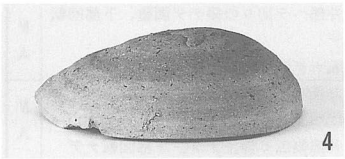
築造時期および追葬

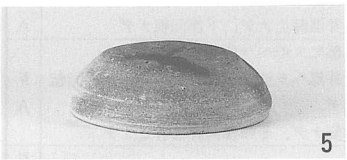
築造年代	古墳時代後期 （6世紀後半）	須恵器型式	Ⅲ期（B） Ⅳ期（A・B-1）	追葬有無	有	人骨有無	無
備　　考	玄室と羨道の天井が落盤。羨道部の大半と前庭部のすべてが宅地や畑の造成のため既に消滅。後世この横穴を何かの目的で利用した痕跡がある。						

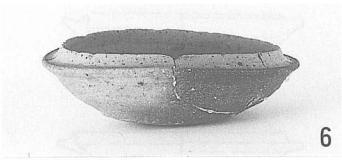

1

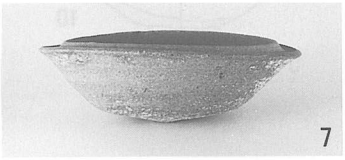

2

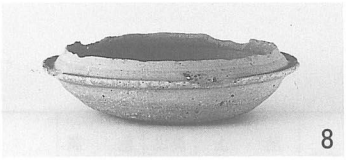
3


4

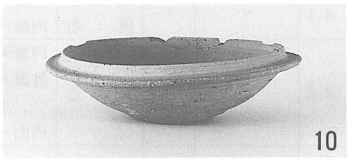

5

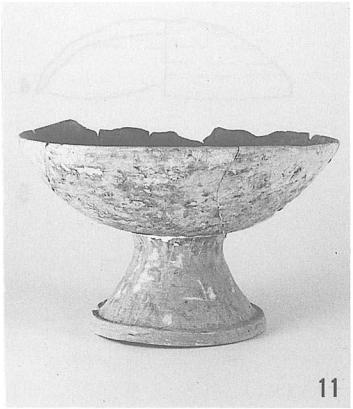

6


7

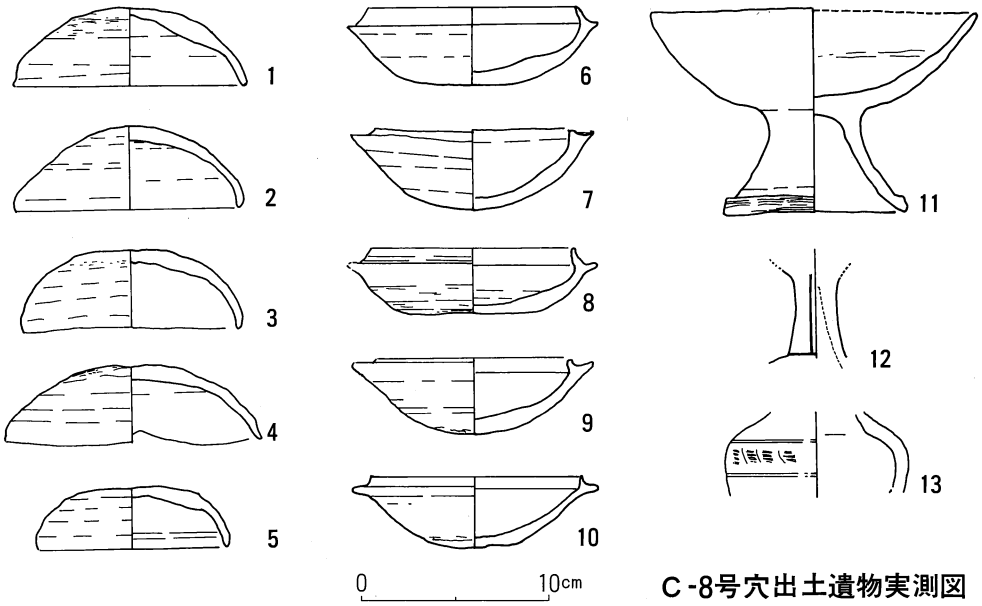

8

9


10


11

C-8号穴出土遺物



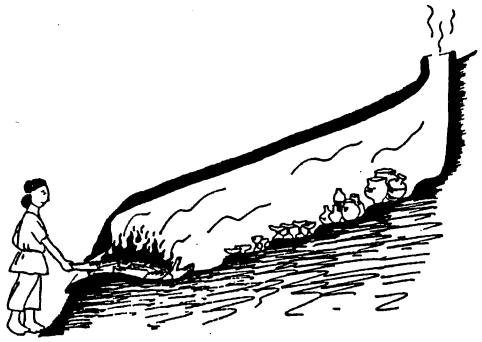
C-8号穴出土遺物実測図

C－8号穴出土遺物観察表

番号	取り上げ番号	器種	寸法（cm） 口径	胴径	底径	器高	胎土	焼成	色調	備考	タイプ
1	No. 60	坏蓋	12.1			4.1	密 細砂を多く含む	良好	灰色	外面－天井部ヘラ切りの後ナデ調整、下部回転ナデ 内面－回転ナデの後天井部静止ナデ	Ⅳ A
2	No. 62	〃	11.7			4.4	〃	〃	黄灰色	外面－天井部ヘラ切りの後静止ナデ調整、天井部にヘラ記号 内面－天井部幅広く静止ナデ、下部回転ナデ	Ⅳ A
3	No. 63	〃	11.2			4.1	〃	〃	黒灰色 灰色	外面－天井部ヘラ切りし、ナデ調整 内面－天井部静止ナデ、下部回転ナデ	Ⅳ A
4	No. 69	〃	13.4			4.2	〃	〃	黄灰色	内面天井部に×のヘラ記号 外面－天井部ヘラ切りの後ナデ調整。下部回転ナデ 内面－回転ナデ、その後天井部静止ナデ	Ⅳ A
5	No. 66	〃	9.9			3.2	密	〃	灰色	外面－天井部ヘラ切りの後ナデ、下部回転ナデ 内面－回転ナデ、天井部に静止ナデ	Ⅳ B 1
6	No. 59	坏身	13.2	（受部）11.0		4.0	密 細砂を多く含む	〃	青灰色	外面－底部ヘラ切りの後ナデ調整、上部回転ナデ 内面－底部静止ナデ、上部回転ナデ	Ⅳ A
7	No. 61	〃	12.6	（〃）10.1		4.3	密	〃	灰色	外面が自然釉が付着 外面－底部ヘラ切り後ナデ調整、上部回転ナデ 内面－回転ナデ、底部のみ静止ナデ	Ⅳ A
8	No. 64	坏身	13.1	（受部）10.7		3.5	密 細砂を多く含む	〃	〃	外面－底部回転ヘラ削り（右回り）上部回転ナデ 内面－回転ナデの後底部に静止ナデ	Ⅲ B

番号	取り上げ番号	器種	寸法（cm） 口径	胴径	底径	器高	胎土	焼成	色調	備考	タイプ
9	No. 65	〃	12.4	（〃）10.2		4.0	〃	〃	黒灰色 黄灰色	外面－底部ヘラ切りの後ナデ、上部は回転ナデ 内面－回転ナデ、底部に静止ナデ	Ⅳ A
10	No. 70	〃	12.9	（〃）11.2		3.7	〃	〃	灰色	外面－底部ヘラ切り後若干静止ナデ、上部回転ナデ 内面－底部静止ナデ、上部回転ナデ 受部は真横に伸び、立ち上がりは垂直	Ⅳ A
11	No. 67	高坏	17.2		（脚）9.6	10.7	〃	不良	黄褐色	外面－前面回転ナデ 内面－回転ナデ	Ⅳ
12		〃					〃	良好	灰色	外面－三方の切り込み有り，一条の沈線あり，回転ナデ 内面－回転ナデ	Ⅲ 末
13		甕	9.8				〃	〃	〃	外面－二条の沈線を入れて、その前にクシ状刺突状 内面－回転ナデ	Ⅲ 末

考古学豆知識　No. 1 ―― 須恵器は硬い ――



宮尾横穴群からは須恵器という焼物が大量に出土しました。古代の代表的な土器です。今から約1500年くらい前、朝鮮半島から日本へ最新技術として伝わりました。それまでの素焼の容器にくらべ、はるかに硬くてこわれにくい。だからまたたく間に全国へひろまりました。

この絵のように「あな窯」というトンネル状の窯がポイントです。1100℃以上にも高温になるそうです。なお、粘土で形をつくる時には「ろくろ」を使っていました。

C－9号穴

C－8号穴の南隣にあります。同じく便化家形の形式です。7世紀前半につくられました。玄室の右側と左側とは奥行きの長さにちがいがあります。羨道の天井は落ちていますが、玄室の天井はほぼ原形を保っています。扉石はやはり海石を積み上げていますが、山の石（地山と同じ岩質）をいくつか補充しています。羨門には板状の扉をはめこむことができるように「繰込」をつくっています。それがあるにもかかわらず、自然石を積み上げて閉塞しています。この穴もC－7号のように前庭～羨道が、玄室の中軸線と約15度ずれています。

玄室の入口付近には左・中央そして右というふうに枕石のような石がおかれています。3体を並べるにはちょうどいい位置です。副葬品には土器類のなかに耳環（銅に金メッキをしたイヤリング）が2個あります。1個は中央の排水溝の中から、もう1個は、土師器の坏に被われた形で出てきました。

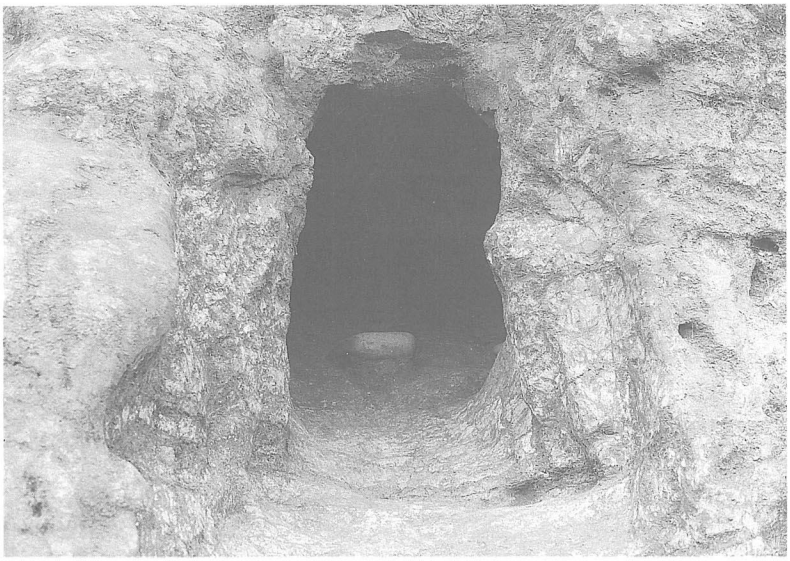
蓋（図の6）は蓋坏の蓋ではありません。あまり類例のない珍しい品です。坏（同図の12）は他に例の少ないもので、ひょっとして近畿地方からの搬入品かもしれません。もう1つの坏（同図13）は、日常生活で使っていたのを、祭祀（葬式）のために底に穴をあけたかもしれません。

C－9号穴観察表　（単位：m）

玄室	標高（床面）	平均 10.80	奥行	2.25	奥幅	1.80	前幅	1.48	最大幅	2.04	高さ	1.16	
	平面形	長方形			天井の形態	便化家形			型式	妻入り			
	埋葬施設	左側			右側				奥				
羨道	長さ	0.70	奥幅	0.60	前幅	0.72	高さ	不明	横断面の形	鶏卵形			
閉塞施設	石材	自然石（海石と地山の石）38個								繰込有無	有		
前庭部	長さ	不明					幅	1.30					
排水溝	玄室中央と右壁												
その他													

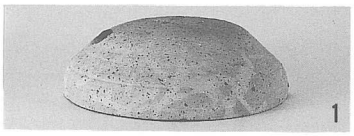
C-9号穴

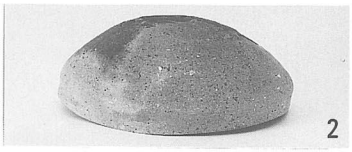
1　中央がC-9号穴。左どなりはC-10号穴、その左どなりはC-11号穴、その左上方はC-15号穴。
C-9号穴の右どなりはC-8号穴、その右どなりはC-7号穴。

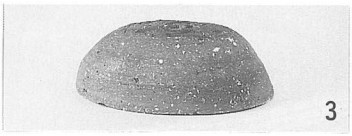


2　C-9号穴を前庭部から見たところ。

3　C-9号穴の玄室内の様子
（枕石と遺物の出土状況）

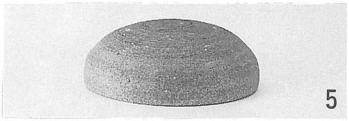

1

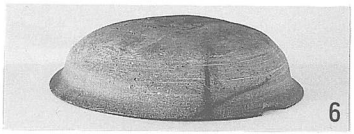

2

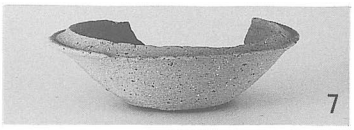

3

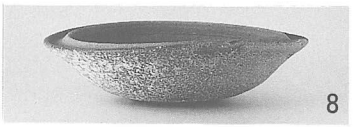
3の底部の麻布痕拡大写真

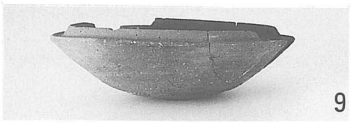
4


5


6

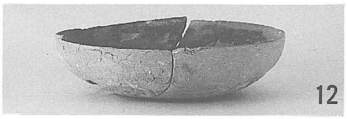

7


8


9

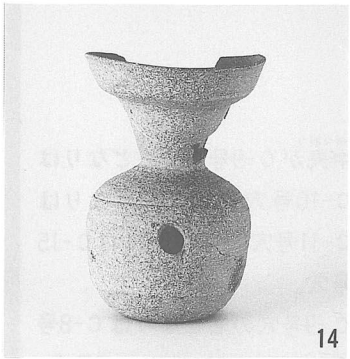
10

11


12

12の暗文拡大写真

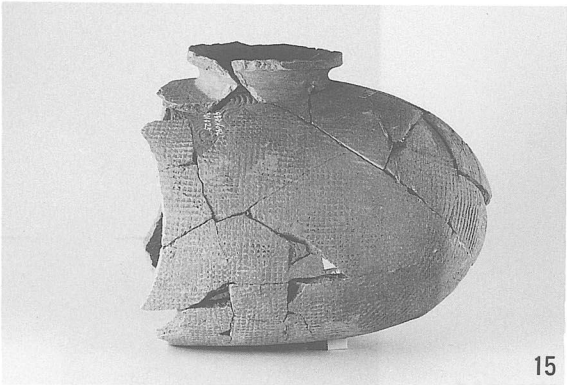
13


14

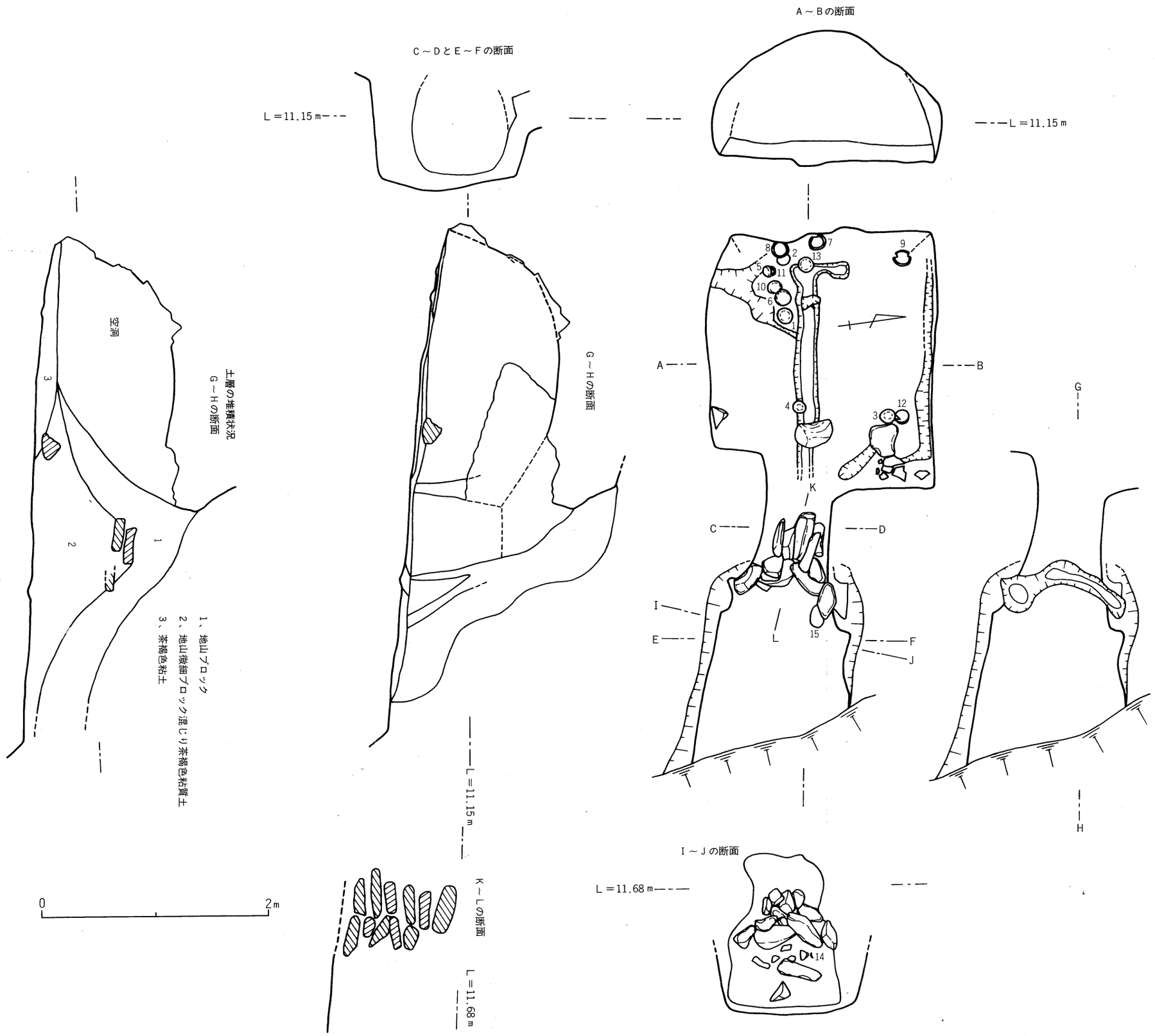
17

18

16


15

C-9号穴出土遺物


A～Bの断面
C～DとE～Fの断面
L＝11.15ｍ
G～Hの断面
土層の堆積状況
G～Hの断面
空間
1、地山ブロック
2、地山微細ブロック混じり茶褐色粘質土
3、茶褐色粘土
0
2ｍ
K～Lの断面
L＝11.68ｍ
I～Jの断面
A
B
C
D
E
F
G
H
I
J
K
L

C-9号穴実測図

遺物出土位置

玄　　室	坏蓋５個、蓋１個、坏身５個、横瓶１個、土師器坏２個、耳環２個
羨　　道	なし
前　　庭	なし
そ の 他	閉塞施設の中に横瓶１個と甕１個

築造時期および追葬

築造年代	古墳時代後期（７世紀後半）	須恵器型式	Ⅳ期（Ａ・Ｂ－１・Ｂ－２）	追葬有無	有	人骨有無	無
備　　考	羨道の天井部落盤。						

Ｃ－９号穴出土遺物観察表

番号	取り上げ番号	器種	寸法（cm） 口径	胴径	底径	器高	胎土	焼成	色調	備考	タイプ
1	No. 100	坏蓋	12.0			4.0	密 細砂を多く含む	不良	白灰色 橙色	外面－天井部ヘラ切り後ナデ調整、下部回転ナデ、沈線１条を有す 内面－天井部静止ナデ、下部回転ナデ ７とセットになる。口唇部に１条の沈線	Ⅳ A
2	No. 106	〃	12.4			4.9	〃	良好	暗青色	外面－天井部ヘラ切り、下部回転ナデ 内面－底部静止ナデ、下部回転ナデ	Ⅳ A
3	No. 97	〃	10.5			3.9	荒い砂を含む	〃	暗灰色	外面－回転ナデ、天井部に若干の静止ナデ 天井部の一部に麻布痕有り 内面－回転ナデ、天井部に若干の静止ナデ	Ⅳ B 1
4	No. 98	〃	10.8			4.3	密 細砂を少し含む	〃	灰色	外面－天井部ナデ、下部回転ナデ 内面－天井部ナデ、下部回転ナデ	Ⅳ B 1
5	No. 103	〃	9.1			3.3	密 細砂を多く含む	〃	暗青色	外面－天井部ヘラ削り、下部回転ナデ 内面－ナデ、下部回転ナデ 11とセットになる。	Ⅳ B 2
6	No. 101	蓋	13.9			3.6	密 細砂を少し含む	〃	灰色	蓋坏の蓋ではない，類例少ない。 外面－天井部ヘラ切り後ナデ、下部回転ナデ 内面－天井部静止ナデ、下部回転ナデ 下端部に若干の自然釉	
7	No. 108	坏身	13.4	（受部）10.2		4.1	細砂を多く含む	不良	白灰色 橙色	外面－底部ヘラ切り後ナデ、上部回転ナデ 内面－底部静止ナデ、上部回転ナデ １の蓋とセットになる。	Ⅳ A
8	No. 105	〃	13.6	（受部）10.0		3.6	密	良好	灰色	外面－底部ナデ、上部ヘラ切り後ナデ 内面－底部静止ナデ、上部回転ナデ 外面に自然釉有り。	Ⅳ A
9	No. 109	〃	13.1	（受部）10.1		4.2	細砂を多く含む	〃	暗青色 茶褐色	外面－底部ヘラ切り後ナデ調整、上部回転ナデ 内面－底部静止ナデ、上部回転ナデ 内面に×のヘラ記号	Ⅳ A
10	No. 102	〃	11.5	（受部）9.5		3.4	〃	〃	灰色	外面－底部ヘラ切り後ナデ調整、上部回転ナデ 内面－底部静止ナデ、上部回転ナデ	Ⅳ B 1
11	No. 104	〃	9.9	（受部）7.9		3.2	〃	〃	暗青色	外面－底部ヘラ切り後ヘラ削り、上部回転ナデ 内面－回転ナデ ５とセットになる。	Ⅳ B 2

番号	取り上げ番号	器種	寸法（cm） 口径	胴径	底径	器高	胎土	焼成	色調	備考	タイプ
12	No. 95	坏	11.5			3.4	密	良好	赤褐色	土師器。内面に暗文を有す。（内側は螺旋状、外側は放射状）全体の約1/8ほどの部分はC-11号穴前庭堆積土中から検出。 内面上部回転ナデ。内面にヘラ磨きによる光沢有り。	
13	No. 107	坏	12.7			4.2	細砂を含む	〃	黄褐色 赤褐色	土師器。焼成後の底部穿孔。 内外両面ともヘラ磨き。（外面には光沢あり）	
14	No. 19	瓶	9.0	8.5		13.3	密	〃	灰色	外面－下部回転ヘラ削り，胴部以上回転ナデ 内面－回転ナデ 体部中ほどに2条の沈線有り。	
15	No. 20	横瓶	9.7	（長径）22.6 （短径）15.7		17.6	〃	〃	灰白色	外面－格子状タタキ 内面－青海波文のタタキ	
16		〃	10.4	（長径）不明 （短径）18.3		20.2	〃	〃	〃	外面－格子状タタキ 内面－青海波文のタタキ	
17	No. 99	耳環	長径 3.1	短径 2.8	太さ 0.7～0.8					かなり痛んだ金環である。	
18	No. 96	〃	長径 3.1	短径 2.9	太さ 0.8					かなり痛んだ金環である。 番号12の坏で覆われた状態で出土した。	

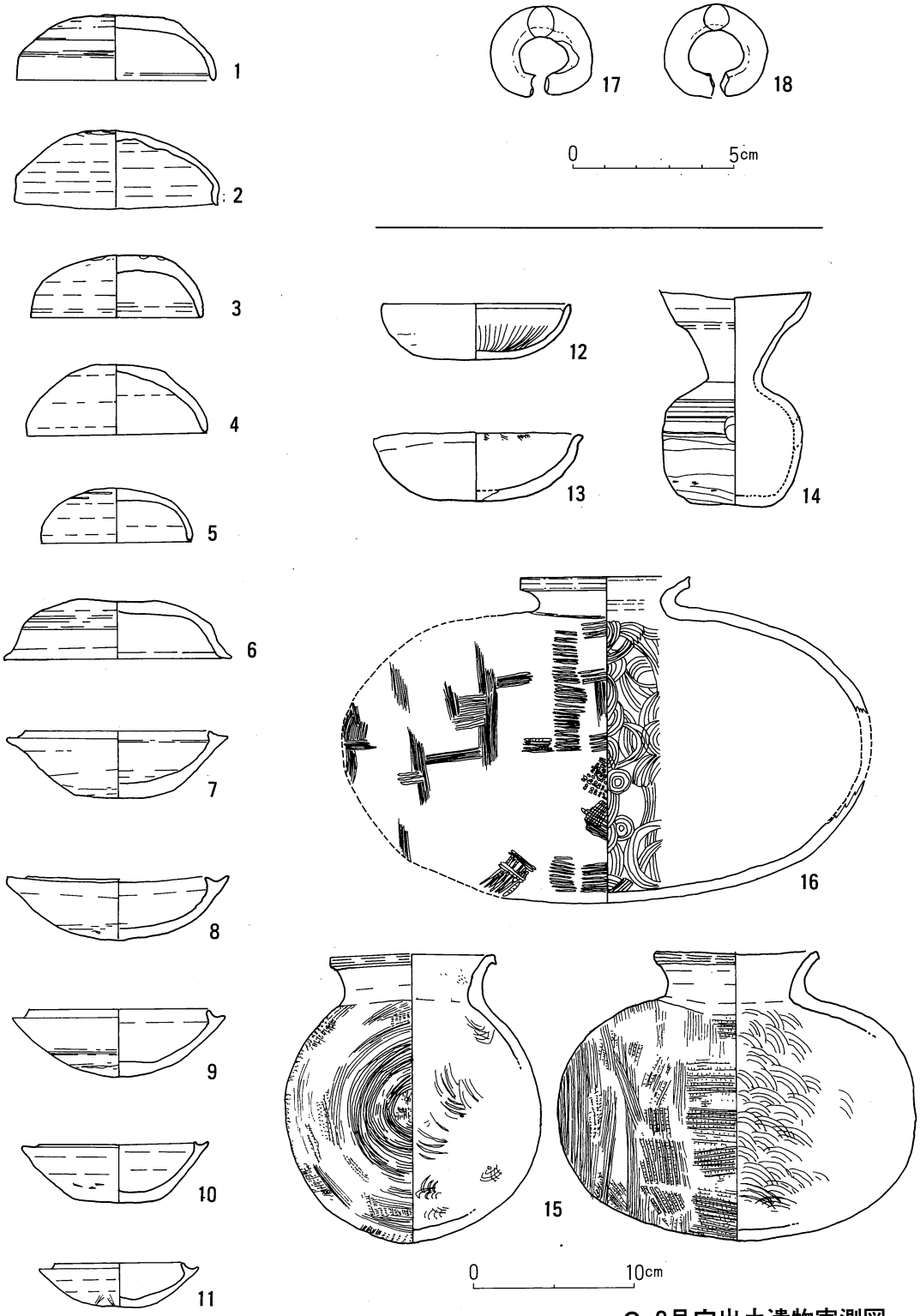
考古学豆知識 No.2 ——古代の食器——

蓋坏

高坏

瓶

宮尾横穴群からも当時の人々が日常生活で使っていた食器がたくさん出土しました。蓋坏は今の茶碗でしょうか。高坏は食物を盛るもの。変わったのが瓶です。胴体のまん中に穴が1つあいています。ここに竹筒のようなものを差しこんで、ちょうど今の「きゅうす」のように水や酒などの液体を注いだのでしょうか。



C-9号穴出土遺物実測図

C－10号穴

C－9号穴の南隣り。壁と天井の境目がないテント形というタイプの横穴です。（玄室の天井の形がキャンプのテントに似ている）扉石がかなりこわれていました。前庭部は玄室の方向とは約15度もずれて斜めにつくられていますし、右側の壁の一部は粗い仕上げになっています。羨道の両壁もシャープになっていません。これらは局部的に露出している硬い岩のため掘り辛かったからでしょう。

玄室の床面はかなり凸凹しています。後世、何者かが扉石をくずして中に入った気配がします。またC－9号穴ほど極端ではありませんが、玄室の右壁の長さが左壁より約10センチ短かい点に気がつきます。

なお、付属して掘られた小穴は一体何でしょうか。そのころ（古墳時代）につくられたものにはまちがいありません。明確な根拠はありませんが、例えば小児用と考えたらどうでしょうか。

出土した土器から、C－10号穴は、7世紀前半に使い始められ、7世紀後半にも追葬があったことがわかります。

C－10号穴観察表

（単位：m）

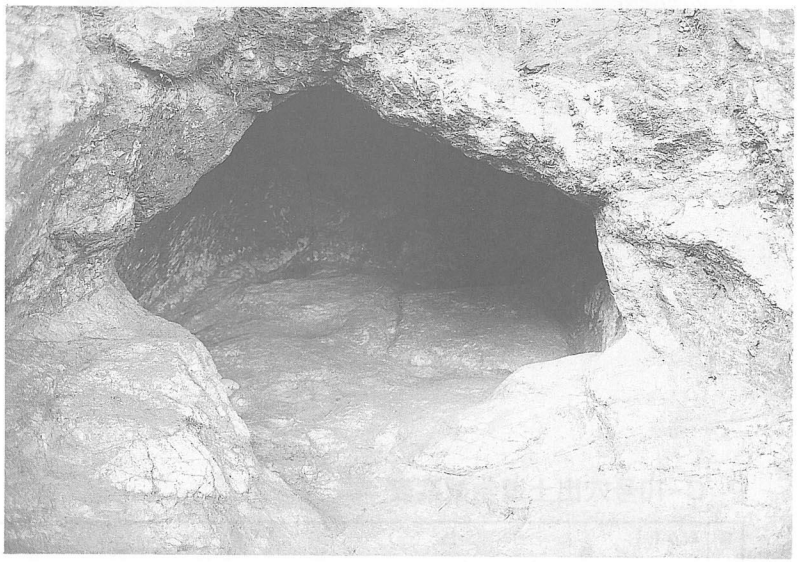
玄室	標高（床面）	平均 11.80	奥行	2.00	奥幅	1.68	前幅	1.68	最大幅	1.72	高さ	1.14
	平面形	長方形			天井の形態	テント形			型式	妻入り		
	埋葬施設	左側			右側				奥			
羨道	長さ	不明	奥幅	不明	前幅	不明	高さ	不明	横断面の形	不明		
閉塞施設	石材	自然石39個、ただし半壊状態なので元の数は不明。								繰込有無	無	
前庭部	長さ	3.80					幅	0.88				
排水溝	玄室中央と右壁に沿って。											
その他	玄室右壁側に不定形の小穴を設けている。											

遺物出土位置

玄室	坏蓋1個
羨道	なし
前庭	坏蓋1個、坏身1個
その他	

C-10号穴

1　半壊状態の扉石と前庭から出土した土器

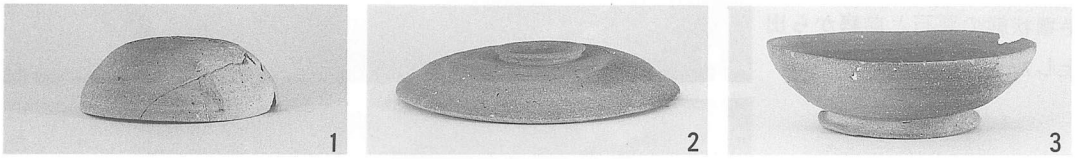


2　C-10号穴の玄室と羨道部

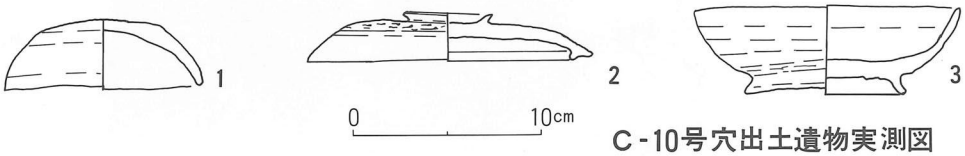
3　玄室の右側に設けられた小穴

築造時期および追葬

築造年代	古墳時代後期（7世紀前半）	須恵器型式	Ⅳ期（B－1・E）	追葬有無	有	人骨有無	無
備　　考	羨道全体と玄室の一部の天井が落盤。						



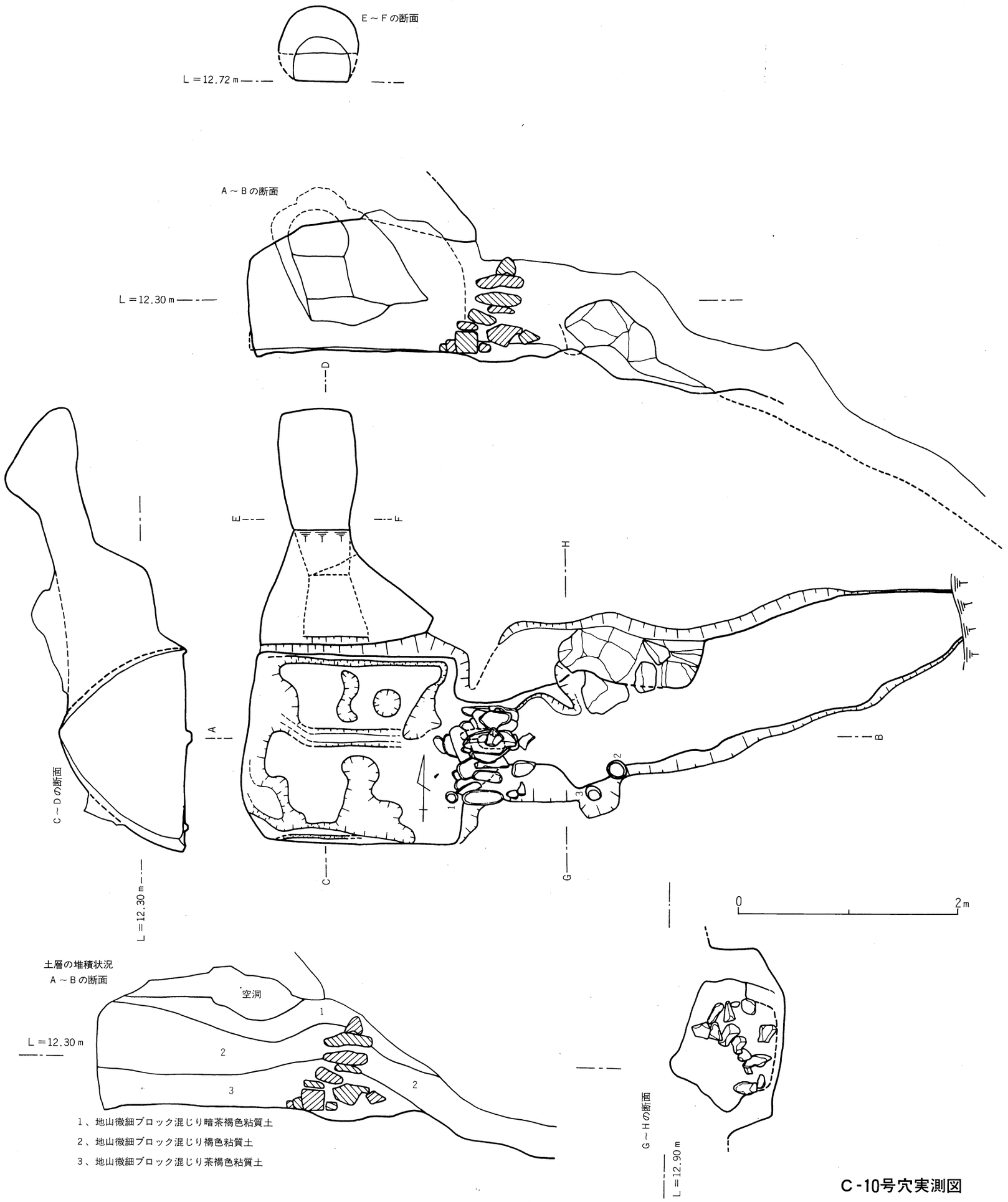
C-10号穴出土遺物



C-10号穴出土遺物実測図

C-10号穴出土遺物観察表

番号	取り上げ番号	器種	寸法（cm） 口径	胴径	底径	器高	胎土	焼成	色調	備考	タイプ
1	No. 110	坏蓋	10.2			3.6	密 少量の細砂を含む	良好	灰色	外面－天井部ヘラ切り後、ナデ調整 下部回転ナデ 内面－天井部静止ナデ、下部回転ナデ 外面天井部にヘラ記号「－」有り。	Ⅳ B 1
2	No. 36	〃	14.9			2.5	密 かなり大粒の砂を含む	〃	暗青色	外面－天井部回転ヘラ削り、下部回転ナデ 内面－天井部静止ナデ、下部回転ナデ 輪状つまみをもち、縁端部内面は「かえり」がつく。 3とセットになる。内面に「×」のヘラ記号	Ⅳ E
3	No. 37	坏身	14.0		8.2	4.6	〃	〃	〃	外面－底部ナデ調整、体部回転ナデ 内面－底部静止ナデ、上部回転ナデ 高台がつく。2とセットになる。内面に「×」の記号	Ⅳ E


E～Fの断面
L＝12.72ｍ
A～Bの断面
L＝12.30ｍ
C～Dの断面
L＝12.30ｍ
0
2ｍ
土層の堆積状況
A～Bの断面
空洞
L＝12.30ｍ
1、地山微細ブロック混じり暗茶褐色粘質土
2、地山微細ブロック混じり褐色粘質土
3、地山微細ブロック混じり茶褐色粘質土
G～Hの断面
L＝12.90ｍ

C-10号穴実測図

C－11号穴

C-11号穴の南隣りにある細長い横穴です。特に羨道と前庭は幅が狭く、まるでウナギの寝床のようです。玄室は丸天井のタイプです。やはり入口は自然石を積み上げた扉石ですが、かなりこわれていました。後世、だれかが扉石をこわして中に入ったのでしょう。玄室の奥半分や床面には二次的加工の痕がたくさん残っています。（元は、玄室の平面形は長方形であったのが、丸く加工されている。）玄室の中に1個も土器がない点も盗掘を受けたことを示しています。C－8号穴と同じように木炭入りの土が穴全体に入っていました。

7世紀前半から半ばごろまで数十年間墓として何度も使われていたとが、出土した土器から言えます。

C-11号穴観察表

（単位：m）

玄室	標高（床面）	平均 10.70	奥行	2.30	奥幅	1.28	前幅	1.10	最大幅	1.38	高さ	0.82	
	平面形	長方形（？）			天井の形態	丸天井			型式	妻入り			
	埋葬施設	左側	無		右側	無			奥	無			
羨道	長さ	不明	奥幅	0.62	前幅	不明	高さ	不明	横断面の形	楕円形			
閉塞施設	石材	自然石17個が残存。扉石の上部がこわされている。								繰込有無	無		
前庭部	長さ	不明					幅	0.45					
排水溝	不明												
その他	羨道と前庭の区別ができない。												

遺物出土位置

玄室	なし
羨道	なし
前庭	坏蓋3個、坏身4個、短頸壺1個、土師器甕1個
その他	

築造時期および追葬

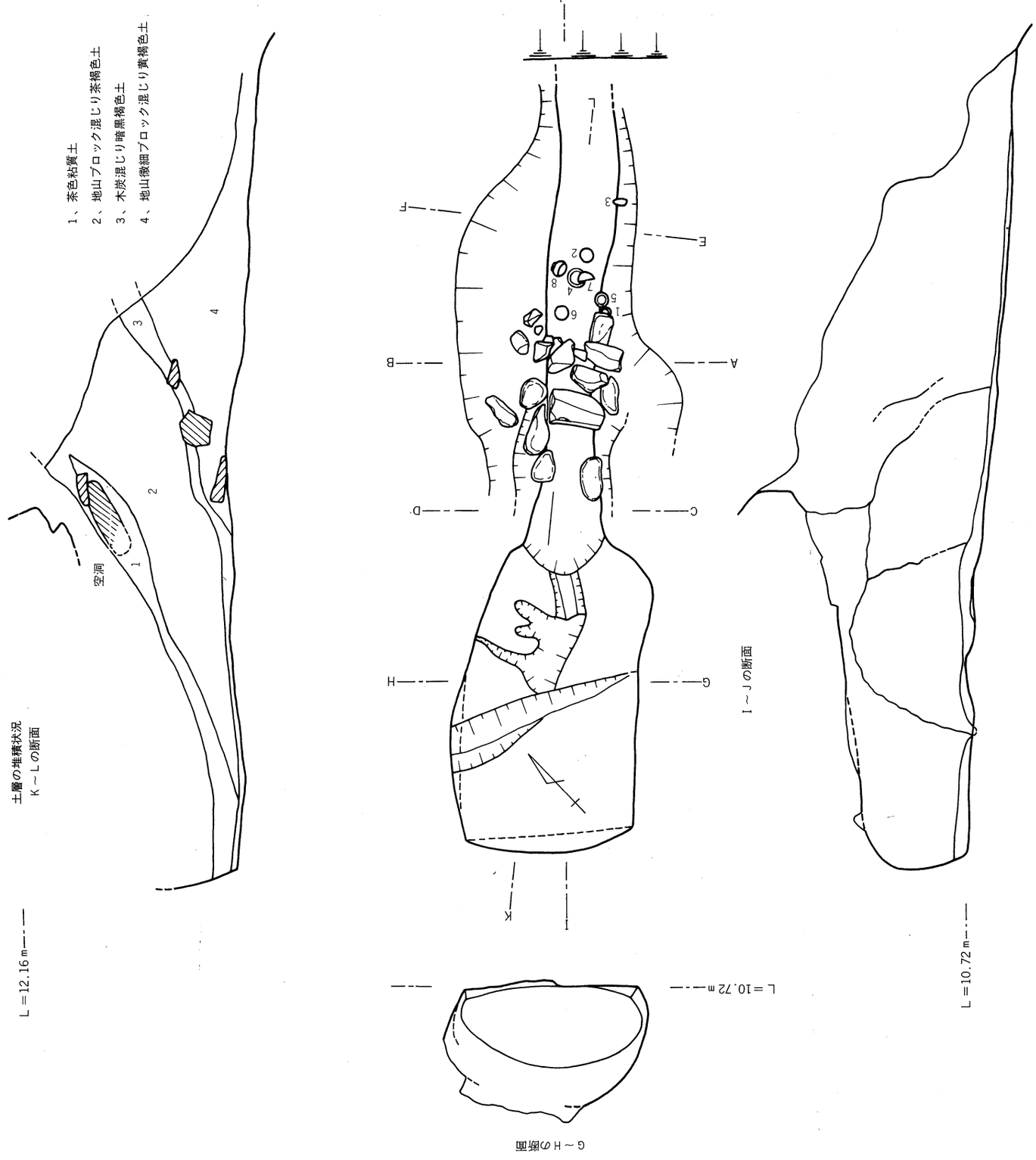
築造年代	古墳時代後期（7世紀前半）	須恵器型式	Ⅳ期（A・B－1・B－2・C・D）	追葬有無	有	人骨有無	無
備考	羨道部の天井が落盤。C－8号穴同様、後世何らかの転用された痕跡がある。（玄室の奥部や床面に二次加工の痕）						

C-11号穴

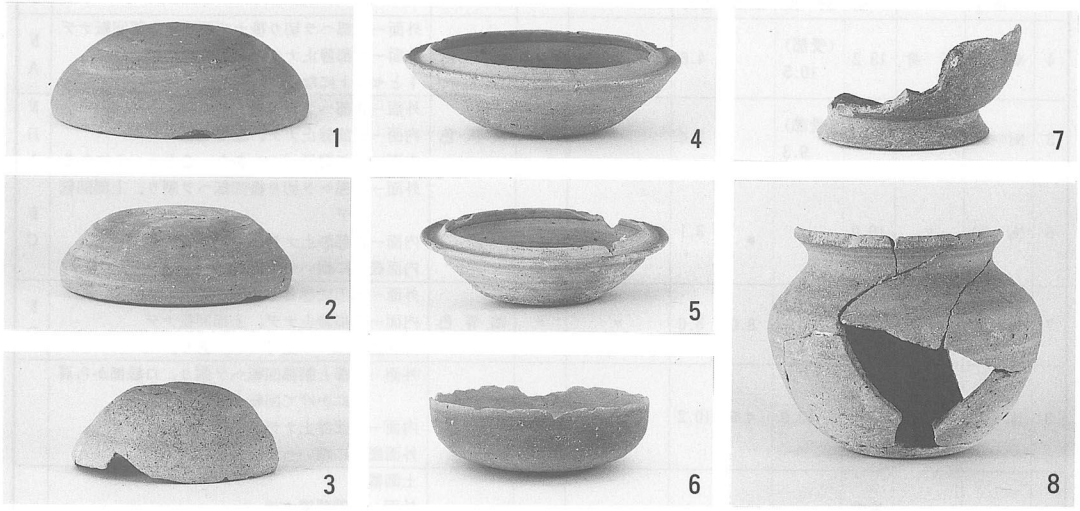
1　上部がこわれていた扉石の状況

2　前庭の土器出土状況

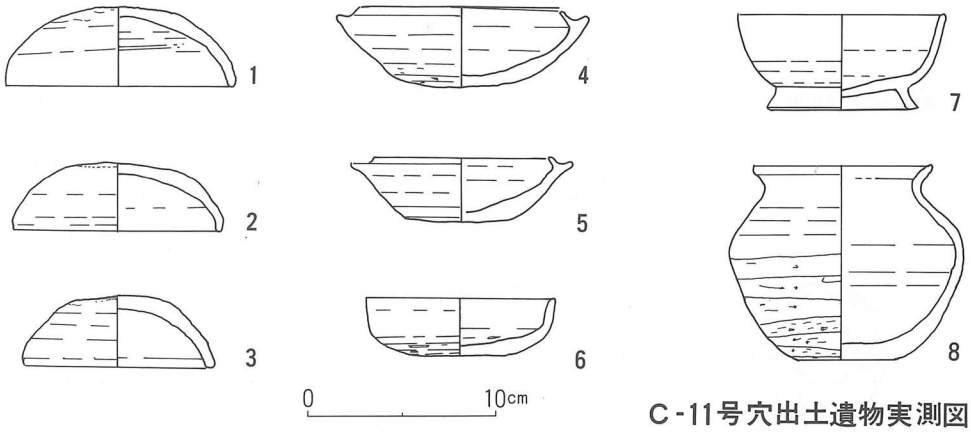
3　左側がC-11号穴。
右側がC-10号穴。


1、茶色粘質土
2、地山ブロック混じり茶褐色土
3、木炭混じり暗黒褐色土
4、地山微細ブロック混じり黄褐色土
空洞
土層の堆積状況
K～Lの断面
L＝12.16ｍ
L＝10.72ｍ
I～Jの断面
A～Bとc～Dの断面
E～Fの断面
G～Hの断面
L＝10.91ｍ
0
2ｍ

C-11号穴実測図



C-11号穴出土遺物



C-11号穴出土遺物実測図

C-11号穴出土遺物観察表

番号	取り上げ番号	器種	寸法（cm） 口径	胴径	底径	器高	胎土	焼成	色調	備考	タイプ
1	No. 51	坏蓋	11.8			4.1	密 細砂を少し含む	良好	灰色	外面－天井部ヘラ切り後ナデ調整、下部回転ナデ 内面－天井部静止ナデ、下部回転ナデ 4とセットになる。	ⅣA
2	No. 56	〃	10.7			3.5	〃	〃	灰色	外面－天井部ヘラ切り後ナデ調整、下部回転ナデ 内面－天井部静止ナデ、下部回転ナデ 内面にヘラ記号「－」あり。5とセットになる	ⅣB1、
3	No. 57	〃	9.8			3.7	〃	〃	淡黄灰色	外面－天井部ヘラ切り後静止ナデ、下部回転ナデ 内面－天井部静止ナデ、下部回転ナデ	ⅣB2

番号	取り上げ番号	器種	寸法（cm）				胎土	焼成	色調	備考	タイプ
			口径	胴径	底径	器高					
4	No. 54	坏身	13.2	（受部）10.5		4.6	〃	〃	灰色	外面－底部ヘラ切り後ナデ調整、上部回転ナデ 内面－底部静止ナデ、上部回転ナデ 1とセットになる。	Ⅳ A
5	No. 52	〃	11.7	（受部）9.3		3.4	〃	〃	淡灰色	外面－底部ヘラ切り後ナデ調整、上部回転ナデ 内面－底部静止ナデ、上部回転ナデ 内面にヘラ記号「－」あり。2とセットになる。	Ⅳ B 1
6	No. 50	〃	10.0			3.1	〃	〃	暗青色	外面－底部ヘラ切り後回転ヘラ削り、上部回転ナデ 内面－底部静止ナデ、上部回転ナデ 内面底部に細いヘラ記号「×」あり。	Ⅳ C
7	No. 55	〃	10.9		8.0	5.0	〃	〃	暗青色	外面－体部底部とも回転ナデ 内面－底部静止ナデ、上部回転ナデ 外面底部にヘラ記号「×」あり。	Ⅳ D
8	No. 53	短頸壺	9.3	12.0	4.9	10.2	密	〃	灰色	外面－底部と胴部回転ヘラ削り、口縁部から肩部にかけて回転ナデ 内面－底部静止ナデ、胴部以上回転ナデ 外面底部に細いヘラ記号あり。	
9		甕	推定19.5				〃	〃	赤褐色	土師器。 外面－口縁部横ナデ 内面－斜め方向のヘラ削り 外面に煤付着	

考古学豆知識 No. 3 ――金メッキの技術――

耳環

宮尾横穴群からも、銅に金メッキをした耳環、つまりイヤリングが見つかりました。どういうふうにして金メッキをしたのか不思議に思われる方もいらっしゃるでしょう。

まず、金を水銀にとかします。それを、銅のイヤリングの表面にぬります。それから350度くらいの温度で熱してやると、水銀だけが蒸発し、金が銅の表面に残ります。こうやって金メッキをしたそうです。ただし1回だけでは金色が不十分なので、2回、3回とくりかえしてやるようです。

C－12号穴

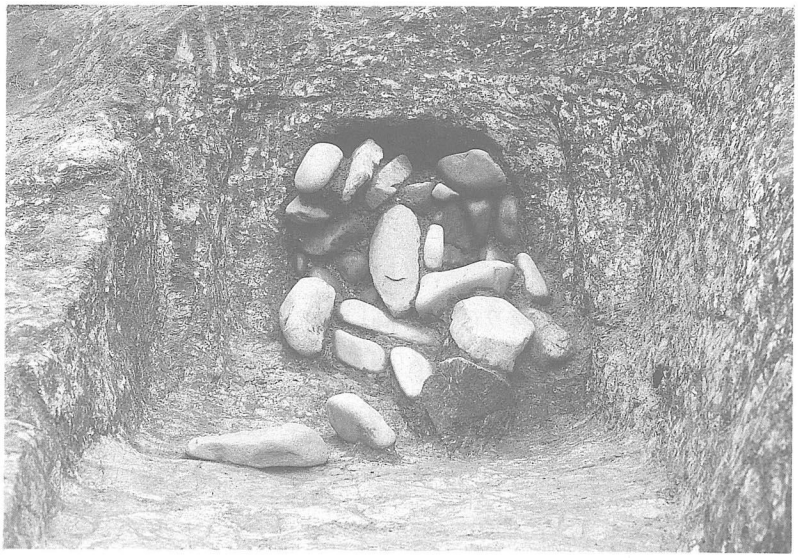
C-11号穴の南隣りのやや高い所にあります。横穴の天井はそのまま残っていますし、玄室の床面、天井、羨門部のくり込み、そしてとびら石の積み上げ方など大変ていねいなつくりのみごとな横穴です。盗掘を受けないで、昔のままの状態で掘り出されました。玄室の天井はテント形になっています。棟の線もつけられています。

このC-12号穴の最大の特徴は、玄室の中央から左壁にかけて床面にびっしりと須恵器（焼物）の大甕の破片が敷き並べてあることです。これを考古学では「須恵器屍床」と言います。この上に遺体を横たえるので、わざわざ大甕（高さ約97センチメートル）をこわしてつくっています。また、豊富な副葬品（土器・耳環）が出土したことも特筆すべきことでしょう。７世紀前半から半ばにかけて何度か追葬されたことがわかります。

密閉された横穴の中は全く真っ暗な闇です。古代人は死後「黄泉の世界」を考えていたようですが、まさにこのC-12号穴のような横穴がそれに当たるのではないでしょうか。扉石の最上段の１個を取りはずした時、1300年ぶりに現代の空気とふれ合ったのです。人骨はすでに土と化し（玄室床面上に堆積した茶色粘土）消えていました。（宮尾横穴群の場合、土質が酸性のため人骨は残りにくいのです。これが奥出雲地方ですと、マサ土なので遺存状況が大変よくなります。）なお、このC-12号穴に限らず、扉石を積み上げる際、「から積み」ではなく、地山を適度に混ぜた粘土でしっかりとつき固める方法がよくわかります。

ところで須恵器屍床の破片からジグソーパズルのようにほぼ元の状態に接合できた大甕。（高さ約97センチ、胴部最大径約66センチ）おそらく、完形品を山の上まで運び、葬儀の過程で意図的にこわしたものでしょう。

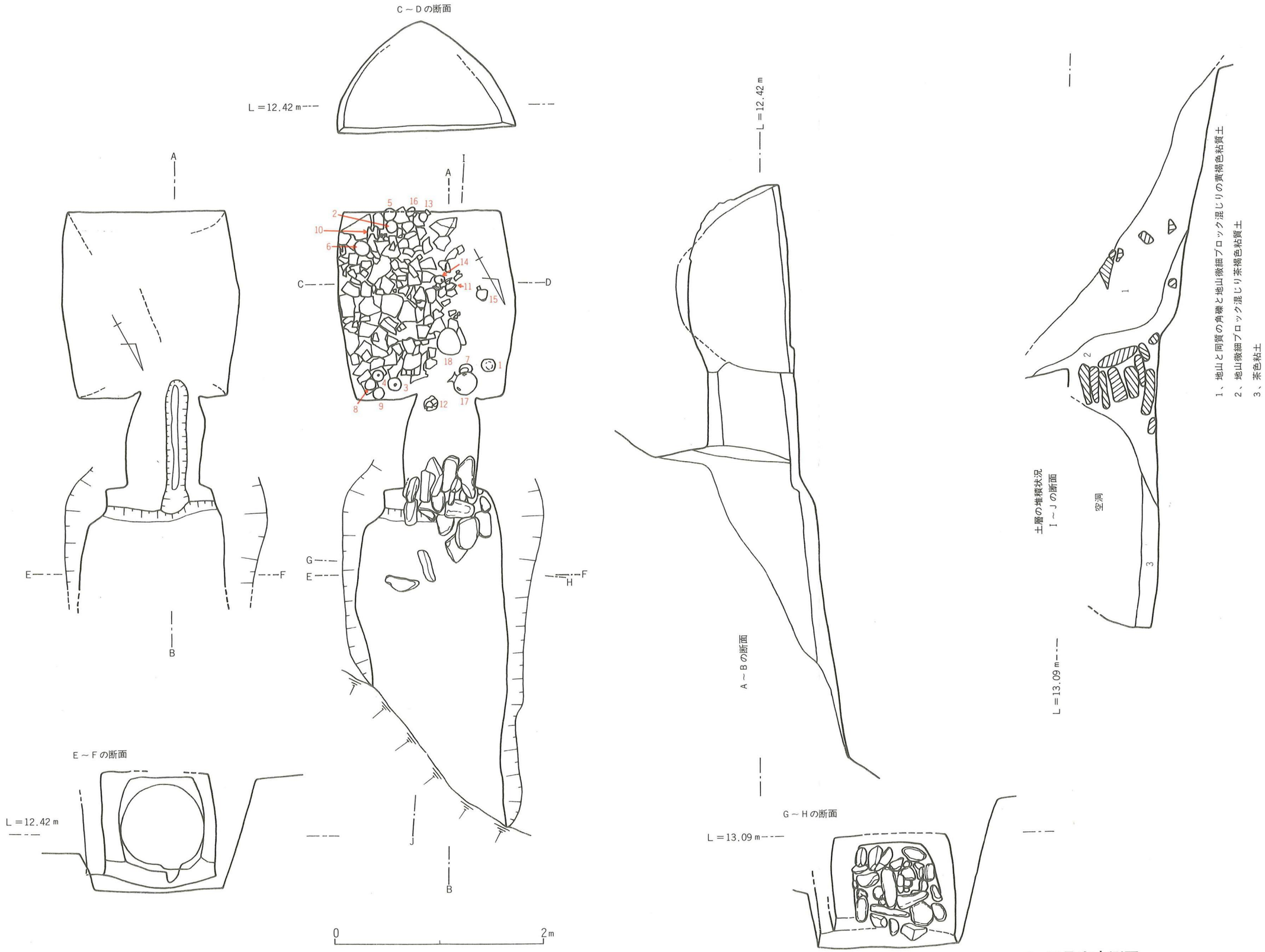
C-12号穴



1　前庭から見た扉石の状況
（完全に入口を閉じている）

2　玄室内の状況
（左側は須恵器屍床）

3　須恵器屍床（奥壁近く）


C～Dの断面
L＝12.42 m
A
B
C
D
E
F
G
H
I
J
E～Fの断面
L＝12.42 m
A～Bの断面
L＝12.42 m
G～Hの断面
L＝13.09 m
土層の堆積状況
I～Jの断面
L＝13.09 m
空洞
1、地山と同質の角礫と地山微細ブロック混じりの黄褐色粘質土
2、地山微細ブロック混じり茶褐色粘質土
3、茶色粘土
0
2m

C-12号穴実測図

C-12号穴観察表

（単位：m）

玄室	標高（床面）	平均 12.10	奥行	1.75	奥幅	1.51	前幅	1.43	最大幅	1.70	高さ	1.04	
	平面形	長方形			天井の形態	テント形			型式	妻入り			
	埋葬施設	左側	須恵器屍床		右側				奥				
羨道	長さ	0.90	奥幅	0.55	前幅	0.68	高さ	0.85	横断面の形	円形			
閉塞施設	石材	自然石（海石）43個を羨門部の天井まで積み上げている。								繰込有無	有		
前庭部	長さ	2.90					幅	1.32					
排水溝	玄室入口から羨門にかけて。												
その他	羨門に段差有り。玄室天井に棟の線有り。												

遺物出土位置

玄室	坏蓋４個、坏身５個、高坏２個、壺１個、瓦泉１個、平瓶２個、提瓶１個、甕１個 須恵器屍床に使用されていた破片で復元した大甕１個、耳環１個
羨道	土師器坏１個
前庭	
その他	

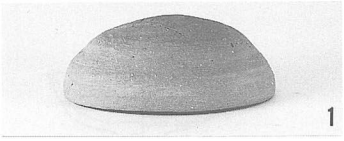
築造時期および追葬

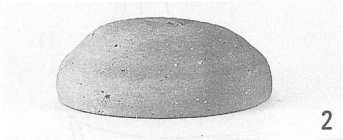
築造年代	古墳時代後期（７世紀前半）	須恵器型式	Ⅳ期（B－１・C）	追葬有無	有	人骨有無	無
備考							

C-12号穴出土遺物観察表

番号	取り上げ番号	器種	寸法（cm） 口径	胴径	底径	器高	胎土	焼成	色調	備考	タイプ
1	No. 143	坏蓋	10.7			3.9	密 少量の細砂を含む	良好	灰色	外面－天井部ヘラ切り後ナデ調整、下部回転ナデ 内面－天井部静止ナデ、下部回転ナデ 外面天井部にヘラ記号「－」あり。５とセットになる。	ⅣB1
2	No. 150	〃	10.7			3.9	〃	〃	〃	外面－天井部ヘラ切り後ナデ調整、下部回転ナデ 内面－天井部静止ナデ、下部回転ナデ ６とセットになる。	ⅣB1
3	No. 139	〃	9.9			2.7	〃	〃	暗青色	外面－天井部回転ヘラ削り、つまみの周辺と下部回転ナデ 内面－天井部静止ナデ、下部回転ナデ 外面天井部に乳頭状のつまみをもつ。縁端部内面には「かえり」がつく。	ⅣC
4	No. 141	〃	9.4			2.9	〃	〃	黄灰色	外面－天井部ナデ、天井部周辺回転ヘラ削り、下部回転ナデ 内面－天井部静止ナデ、下部回転ナデ 外面天井部に乳頭状のつまみをもつ。縁端部内面には「かえり」がつく。外面には自然釉	ⅣC

番号	取り上げ番号	器種	寸法（cm）				胎土	焼成	色調	備考	タイプ
			口径	胴径	底径	器高					
5	No. 149	坏身	11.6	（受部）9.2		3.5	密 少量の細砂を含む	良好	暗青色 黄灰色	外面－底部ヘラ切り後ナデ調整、上部回転ナデ 内面－底部静止ナデ、上部回転ナデ 1とセットになる。	Ⅳ B 1
6	No. 152	〃	11.5	（受部）9.4		3.7	〃	〃	黄灰色	外面－底部ヘラ切り後ナデ調整、上部回転ナデ 内面－底部静止ナデ、上部回転ナデ 2とセットになる。	Ⅳ B 1
7	No. 138	〃	11.7	（受部）9.6		3.7	〃	〃	灰色	外面－底部ヘラ切り後ナデ調整、上部回転ナデ 内面－底部静止ナデ、上部回転ナデ 焼成時のひずみ有り。	Ⅳ B 1
8	No. 142	〃	8.7			3.2	〃	〃	灰色	外面－底部ヘラ切り後ヘラ削り、上部回転ナデ 内面－底部静止ナデ、上部回転ナデ	Ⅳ C
9	No. 140	〃	8.2			2.9	〃	〃	暗青色	外面－底部ヘラ切り後ヘラ削り、上部回転ナデ 内面－底部に粘土塊をつめる。上部回転ナデ	Ⅳ C
10	No. 151	高坏	9.1		（脚）7.2	6.6	密 細砂を多く含む	〃	〃	外面－回転ナデ、坏の底部回転ヘラ削り 内面－坏の底部静止ナデ、それ以外回転ナデ 脚にすかしが2つある。	
11	No. 145	〃	9.7		（脚）7.2	7.2	密	〃	灰色	外面－回転ナデ、坏の底部回転ヘラ削り 内面－坏の底部静止ナデ以外回転ナデ 内外両面に自然釉付着	
12	No. 135	坏	16.8			5.6	〃	不良	淡橙褐色 （底） 黒色	土師器。 内外両面とも口縁部はヘラ磨き（？）下部はナデ調整（？）	
13	No. 147	壺	7.4	8.2	6.0	8.9	密 少量の細砂を含む	良好	灰色	平底 内外両面とも回転ナデ、外面底部はヘラ切り。 内外両面に自然釉付着	
14	No. 146	甕	8.7	8.6	3.8	13.0	〃	〃	灰色 ところどころ茶褐色	外面－底部ヘラ切り後ナデ調整、胴部以下は回転ヘラ削り、上部回転ナデ 内面－回転ナデ 底に細いヘラ記号「×」あり。頸部に二条の沈線あり。受部内面に自然釉。	Ⅳ B 1
15	No. 144	平瓶		13.3		15.0	〃	〃	黄灰色	外面－胴部から底部にかけて回転ヘラ削り、頸部回転ナデ、肩部から胴部にかけてカキ目調整 内面－回転ナデ 外面の頸部と胴部に部分的な自然釉。外面肩部に乳頭状のコブ。	
16	No. 148	〃	5.6	9.0	3.5	10.1	〃	〃	暗青色	外面－底部ヘラ切り後、周辺部を回転ヘラ削り肩部から胴部にカキ目、頸部回転ナデ 内面－回転ナデ 平底を有する。	
17	No. 136	提瓶	12.4	23.3		25.7	〃	〃	灰色	外面－頸部から底部まで片面には格子状タタキもう一方の面には同心円状カキ目、頸部以上もカキ目 内面－頸部から底部まで片面には青海波文タタキ、もう一方の面は回転ナデ、頸部以上は回転ナデ	
18	No. 137	甕	14.2	29.6		33.3	密 やや砂粒が多い	〃	黒灰色	外面－頸部から底部まで格子状タタキの後、回転ナデ、口縁部から頸部まで回転ナデ 内面－頸部から底部まで青海波文のタタキ、口縁部から頸部まで回転ナデ	
19		大甕	推定42.4	推定65.8		推定97.4	密	〃	灰色	外面－体部は平行タタキ 内面－口縁から頸部は回転ナデ、体部は弧状タタキ	
20	No. 38	耳環	長径1.7	短径1.7	太さ0.4					保存状態が悪く、金メッキか銀メッキか不明	


1

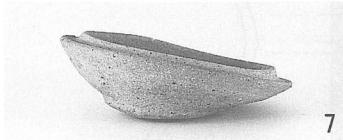

2

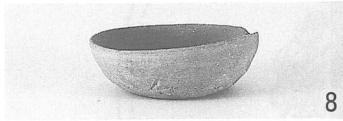
3

4

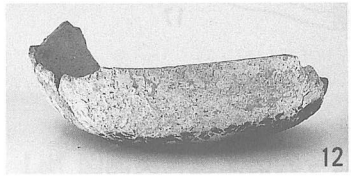
5

6


7


8

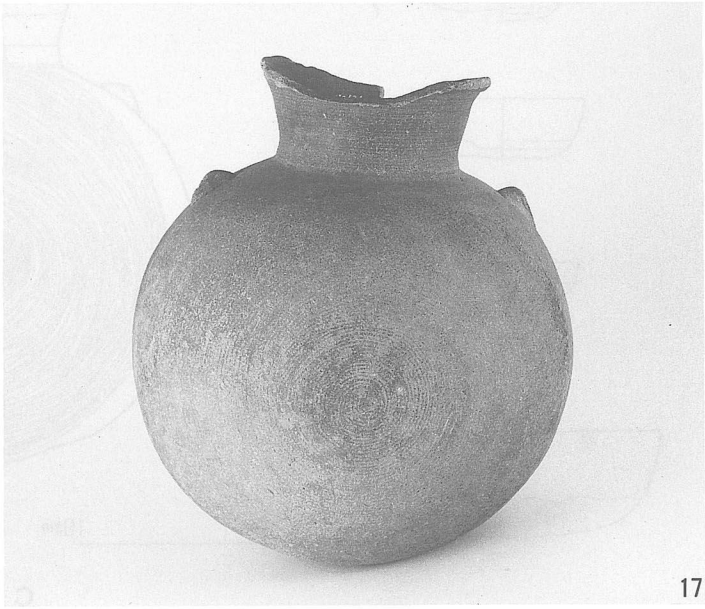
9


12

10

13

15

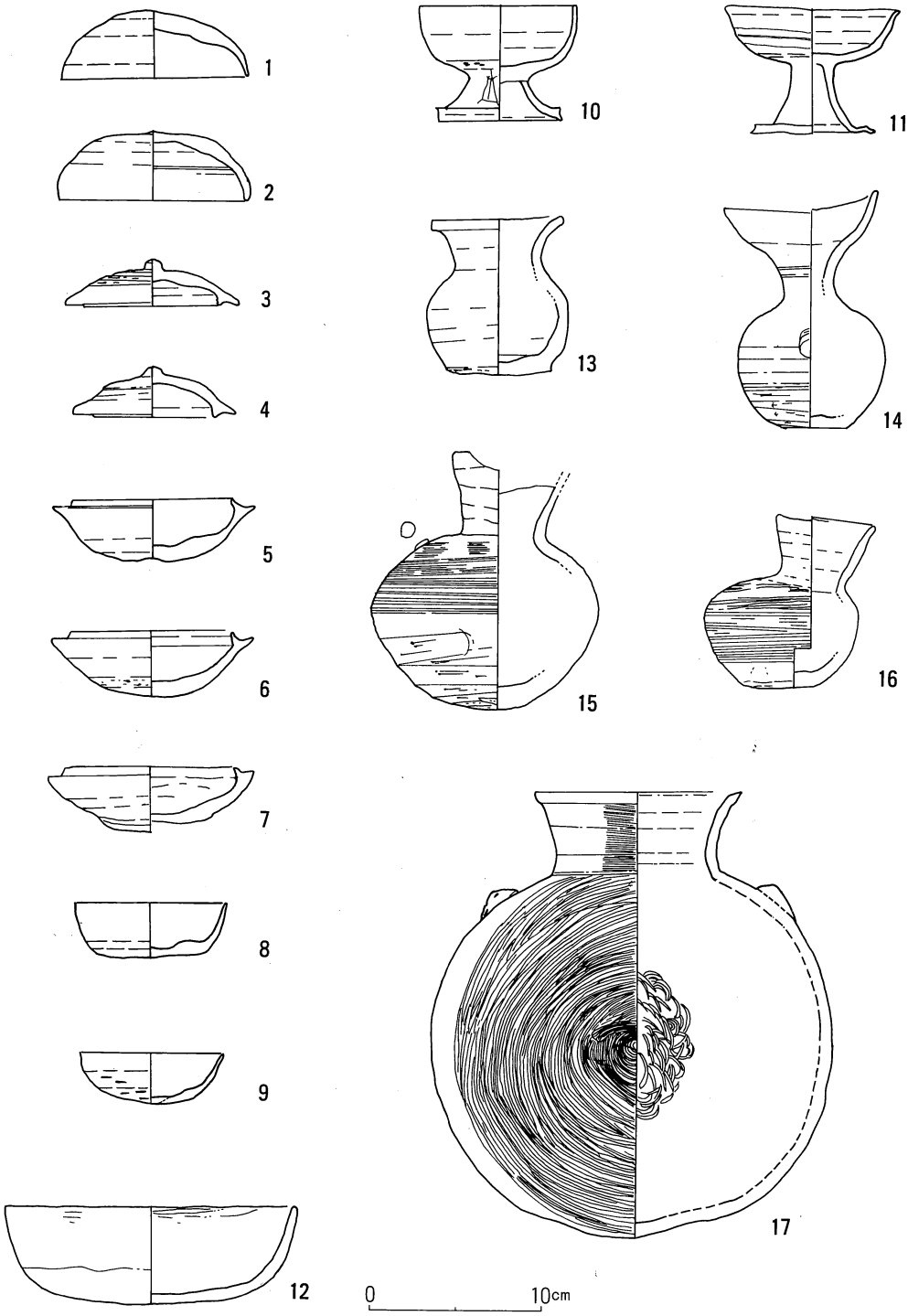

17

11

14

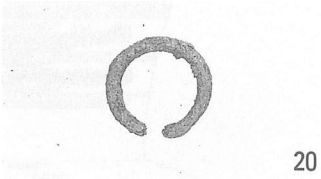
16

C-12号穴出土遺物 No.1



C-12号穴出土遺物実測図 No.1

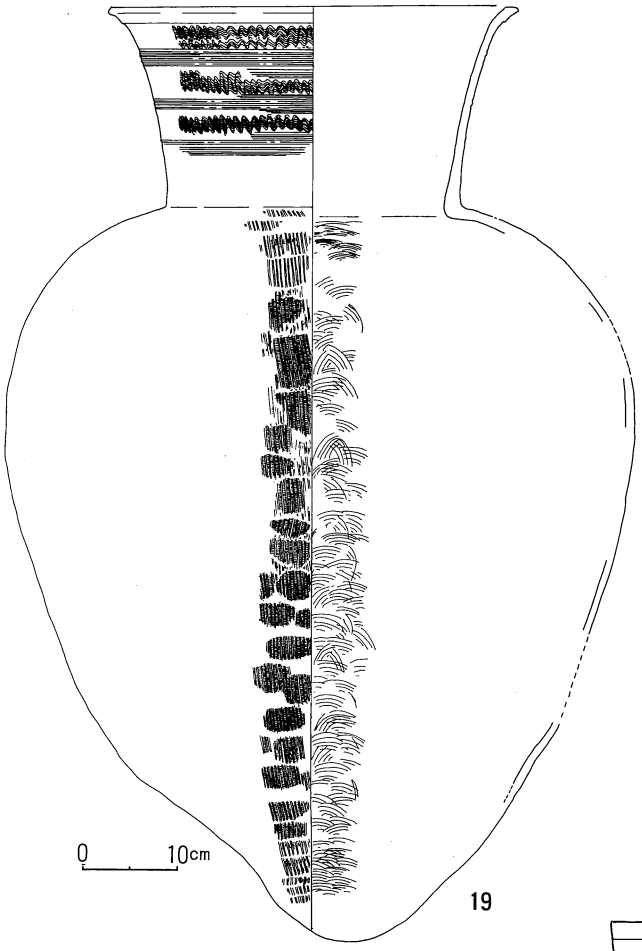
19

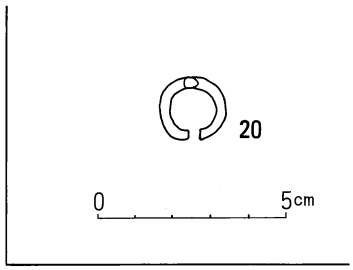


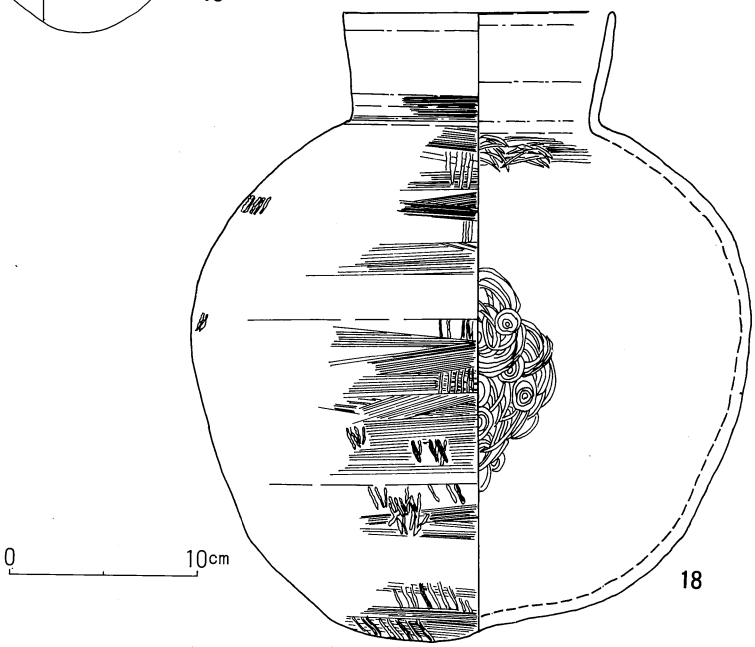
20

18

C-12号穴出土遺物 No.2







C-12号穴出土遺物実測図 No.2

C－13号穴

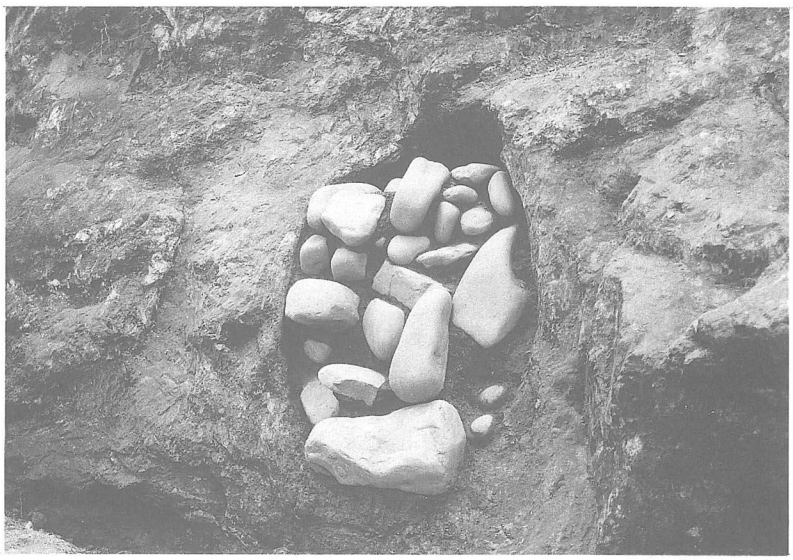
C-12号穴の東隣にあります。今回の発掘調査で最初に見つかった横穴です。羨道の入口は、すでに他の横穴で紹介したように長さ30～50センチの長い丸石（俗に言う“面の長い”石）を小口積してふさいでいました。それを取り除くと非常に長い羨道が続いています。玄室は便化家形ですけど、天井の棟の線ははっきりしています。

注意を引かれるのは床面です。排水溝によって左右２つの低い棺台状のものがつくられ、さらにその上は隣のC-12号穴同様、須恵器片が敷かれた「須恵器屍床」になっています。特に、右側は部分的に欠けてはいますがほぼ全面に敷き並べられているのに対し、左側はベッドのおよそ四分の１の範囲しか敷いてない点が気になります。これは一体どうしてでしょうか。想像ですが、左側は屍床のサイズからして小児用ではないでしょうか。右側の人物の葬送の後、その子どもが死去したため、親の右側屍床から一部須恵器片を抜き取り、左側に移し並べ、その上に横たえたのではないでしょうか。

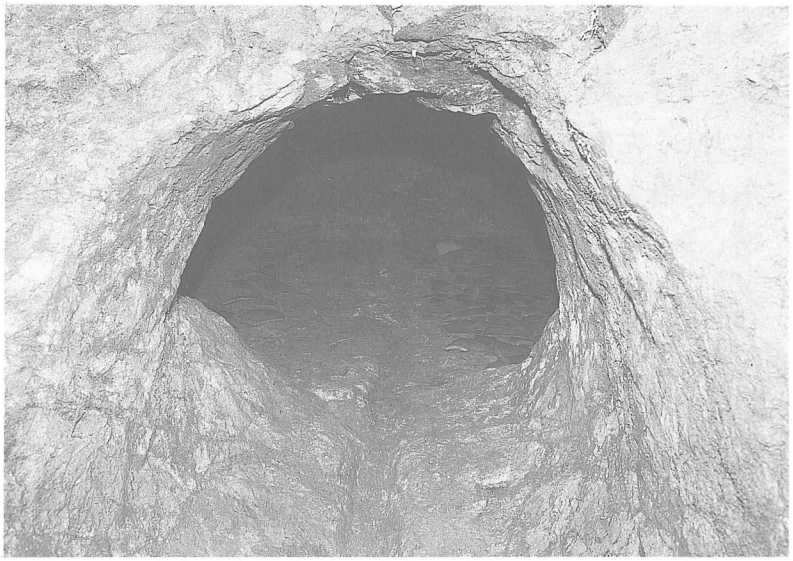
副葬品は耳環１個（実際にはもう１個あったでしょうが、検出できず）と玄室前部左隅にねじ込むように置かれていた須恵器１個でした。そのタイプから７世紀前半という時期がわかります。C－９号穴同様、７世紀の半ば以降は追葬されなかった可能性があります。また須恵器屍床の須恵器片を接合していきましたらC-12号穴と同じようにジャンボな大甕（高さ約88センチ、胴部最大径約69センチ）になりました。

なお、前庭状のテラスについてですが、当初は、他の横穴の玄室床面部分かと思っていました。しかし、壁の傾斜の具合が玄室のそれとは異なります。あいにく宅地造成のため、大部分が削り去られていますので、確かなことが言えません。ふつう前庭部はこれほど幅広くなりませんが、一応今の段階では異形の前庭と考えておきます。

C-13号穴

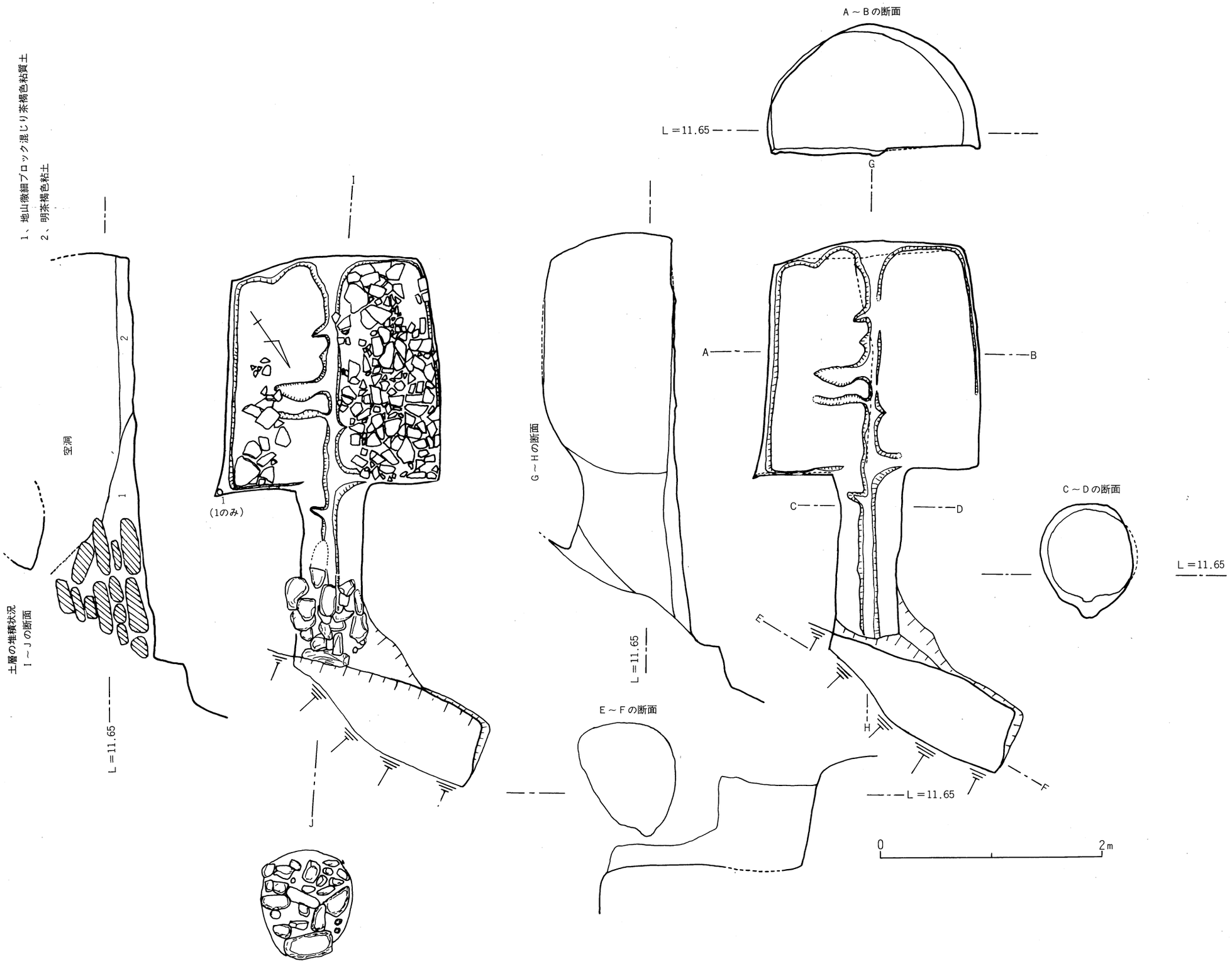


1　横穴入口の扉石の状況



2　入口(羨道)から見た玄室
(床面に須恵器屍床がある)

3　変わった形の前庭部(?)


1、地山微細ブロック混じり茶褐色粘質土
2、明茶褐色粘土
空洞
土層の堆積状況
I～Jの断面
L＝11.65
(1のみ)
G～Hの断面
E～Fの断面
A～Bの断面
C～Dの断面
0
2m

C-13号穴実測図

C-13号穴観察表

（単位：m）

玄室	標高（床面）	平均 11.45	奥行	2.02	奥幅	1.68	前幅	2.02	最大幅	2.02	高さ	1.16	
	平面形	長方形に近い			天井の形態	便化家形			型式	妻入り			
	埋葬施設	左側	小形の須恵器屍床		右側	須恵器屍床			奥				
羨道	長さ	1.52	奥幅	0.65	前幅	0.55	高さ	0.85	横断面の形	楕円形			
閉塞施設	石材	自然石（海石）56個を積み上げて閉塞。								繰込有無	無		
前庭部	長さ	不明					幅	不明					
排水溝	玄室の左右側壁と奥壁に沿って中央に至り、それが羨道先端まで延びている。												
その他	羨道の手前は段差がついて、前庭状のテラスがひろがる。通例の前庭より幅広い異形。（宅地造成時に削去されているため詳細は不明。）玄室天井に棟線有り。												

遺物出土位置

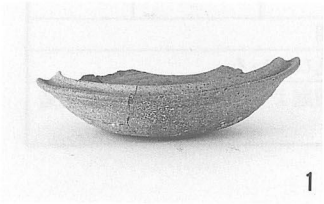
玄室	坏身１個、耳環１個、須恵器屍床に使われていた破片で復元した大甕１個。
羨道	
前庭	
その他	

築造時期および追葬

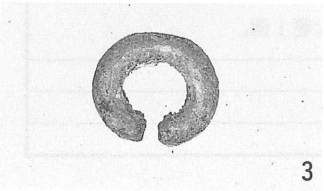
築造年代	古墳時代後期（７世紀前半）	須恵器型式	Ⅳ期（B－１）	追葬有無	不明	人骨有無	無
備考	羨道の天井部は落盤していない。						

C-13号穴出土遺物観察表

番号	取り上げ番号	器種	寸法（cm） 口径	胴径	底径	器高	胎土	焼成	色調	備考	タイプ
1	No. 154	坏身	11.4	（受部）9.3			密 少量の細砂を含む	良好	灰色	外面－底部ヘラ切り後ナデ調整、上部回転ナデ 内面－底部静止ナデ、上部回転ナデ	Ⅳ B 1
2		大甕	推定 42.4	推定 69.0		推定 88.0	〃	〃	外黒色 内灰色	外面－口縁から頸部にかけて回転ナデ、頸部下半には静止ナデも。胴部から底部まで平行タタキ 内面－口縁から頸部にかけて回転ナデ、胴部から底部まで弧状タタキ、また胴部下半から底部にかけてカキ目 破砕して屍床に使用	
3	No. 25	耳環	長径 2.0	短径 1.8	太さ 0.7～0.8					金メッキがわずかに残っている。	



1



3

2

C-13号穴出土遺物

横穴を見に行って

大芦小六年　団野智寛

今日（十一月一日）宮尾横穴群を見に行きました。

横穴群に着くと、よく学校へ来られる教育委員会のおじさんがおられました。ぼくたちは、おじさんのお話を熱心に聞いていました。

「この辺には有力者がいっぱいいたんだよ。」

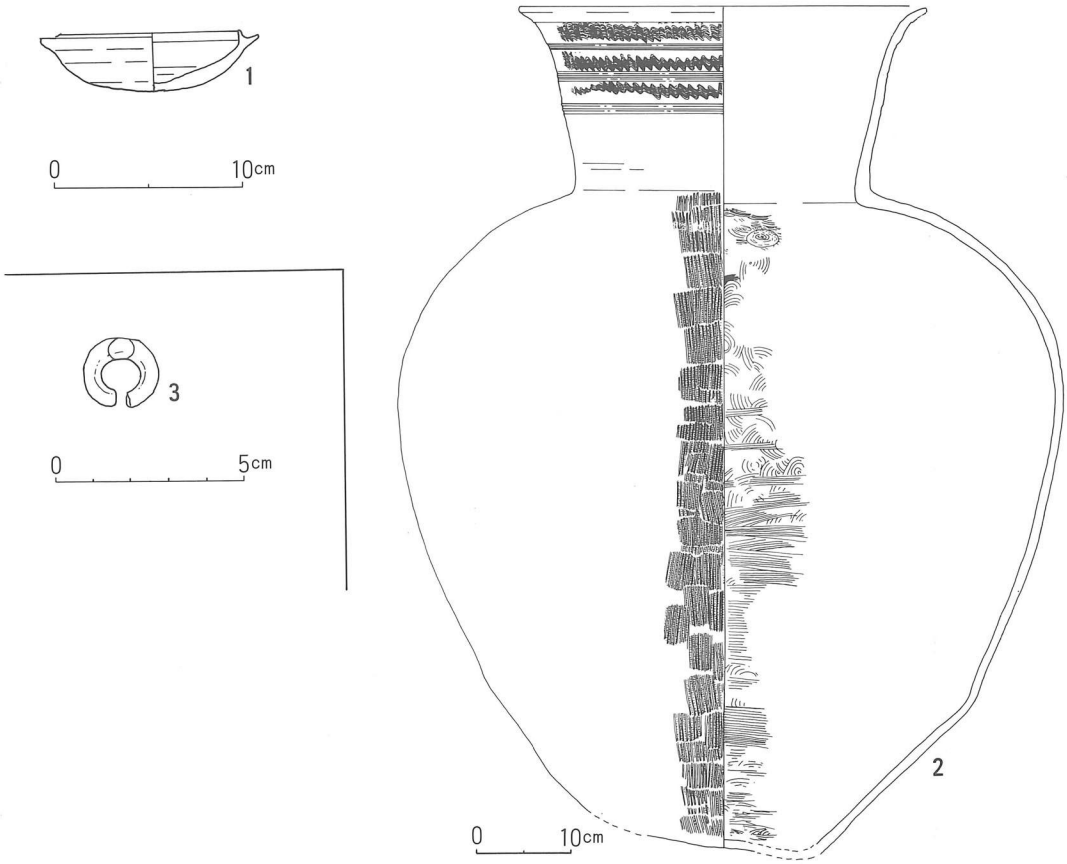
というようなお話を十分位された後、

「それではガケに上がって見て下さい。」

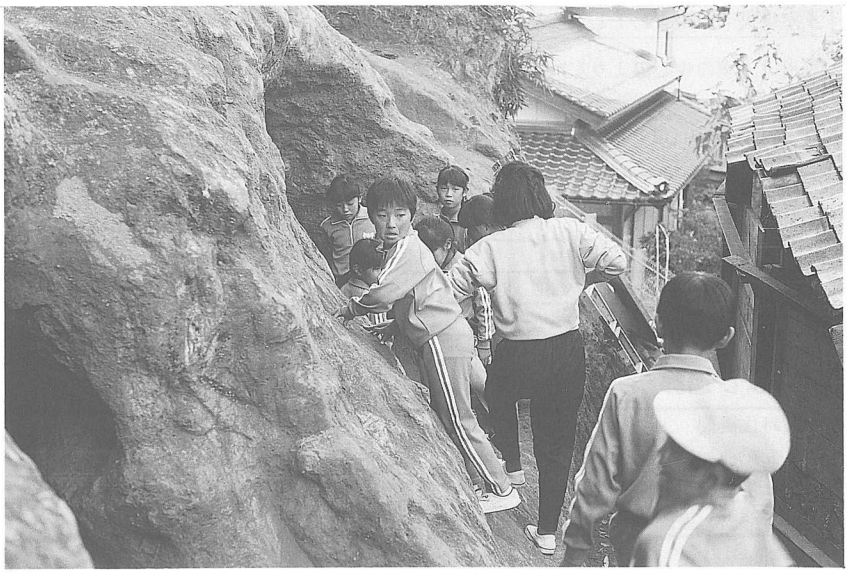
と言われたので、ぼく達はいっせいに横穴に向かいました。

まず初めに、まん中の横穴の中を見ました。部屋の床はちょっともり上がったような所があったので、ここに死んだ人をねかせておくのか、と思いました。それからもっとおくに入って横を見ると、小さな穴がありました。子供もいっしょにうめたそうです。

ほかの横穴もまわって見ていろいろな事がよくわかりました。こうして実際に見られたのでうれしかったです。



C-13号穴出土遺物実測図



C-8号穴の前で　担任の先生もいっしょに

C－14号穴

C-13号穴の東隣りに位置します。おそらく宅地造成の際にでしょうが、大部分がこわれています。発掘調査に入る前、山の斜面の樹木を伐採した時点で見つかりました。横穴の構造、施設そして追葬などを知る手がかりが残っていません。便化家形の形式であることと、玄室床面から出土した須恵器の破片１個から、７世紀前半に使用されていたことがわかります。玄室中央の溝の上から扁平な石が１個出ましたが、その持つ意味は不明です。元々、副葬品はあったでしょうが、ことごとく持ち去られています。

C-14号穴観察表

（単位：m）

玄室	標高（床面）	平均 11.75	奥行	2.00	奥幅	1.70	前幅	不明	最大幅	2.18	高さ	不明	
	平面形	やや丸味をおびた正方形			天井の形態	便化家形			型式	不明			
	埋葬施設	左側			右側				奥				
羨道	長さ	不明	奥幅	不明	前幅	不明	高さ	不明	横断面の形	不明			
閉塞施設	石材	不明								繰込有無	不明		
前庭部	長さ	不明					幅	不明					
排水溝	玄室中央・左壁ぎわそして右袖壁ぎわ。												
その他	羨道は玄室の中心線より左に片寄る。												

遺物出土位置

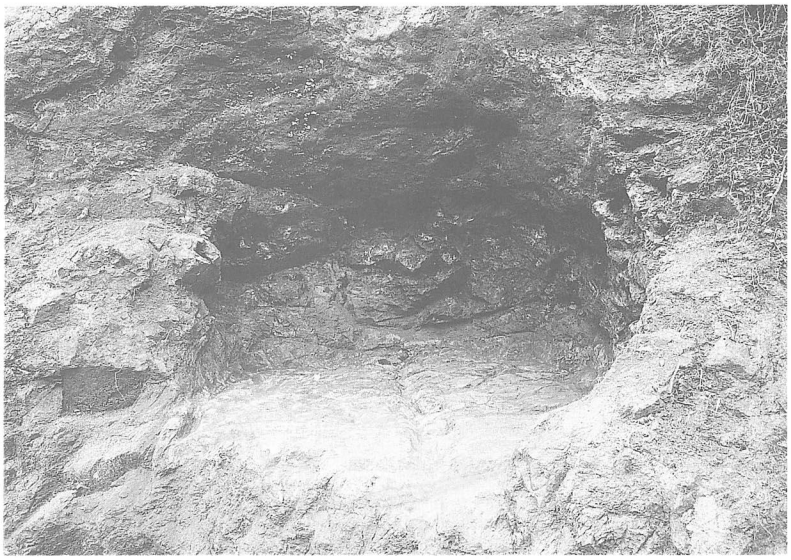
玄室	坏身の小片１個
羨道	
前庭	
その他	

築造時期および追葬

使用年代	古墳時代後期（７世紀前半）	須恵器型式	Ⅳ期（B－1）	追葬有無	不明	人骨有無	無
備考	玄室と羨道の天井が落盤。基底部も玄室の一部、羨道の大部分そして前庭全部が宅地造成のためすでに消去。盗掘され、副葬品は不明。						

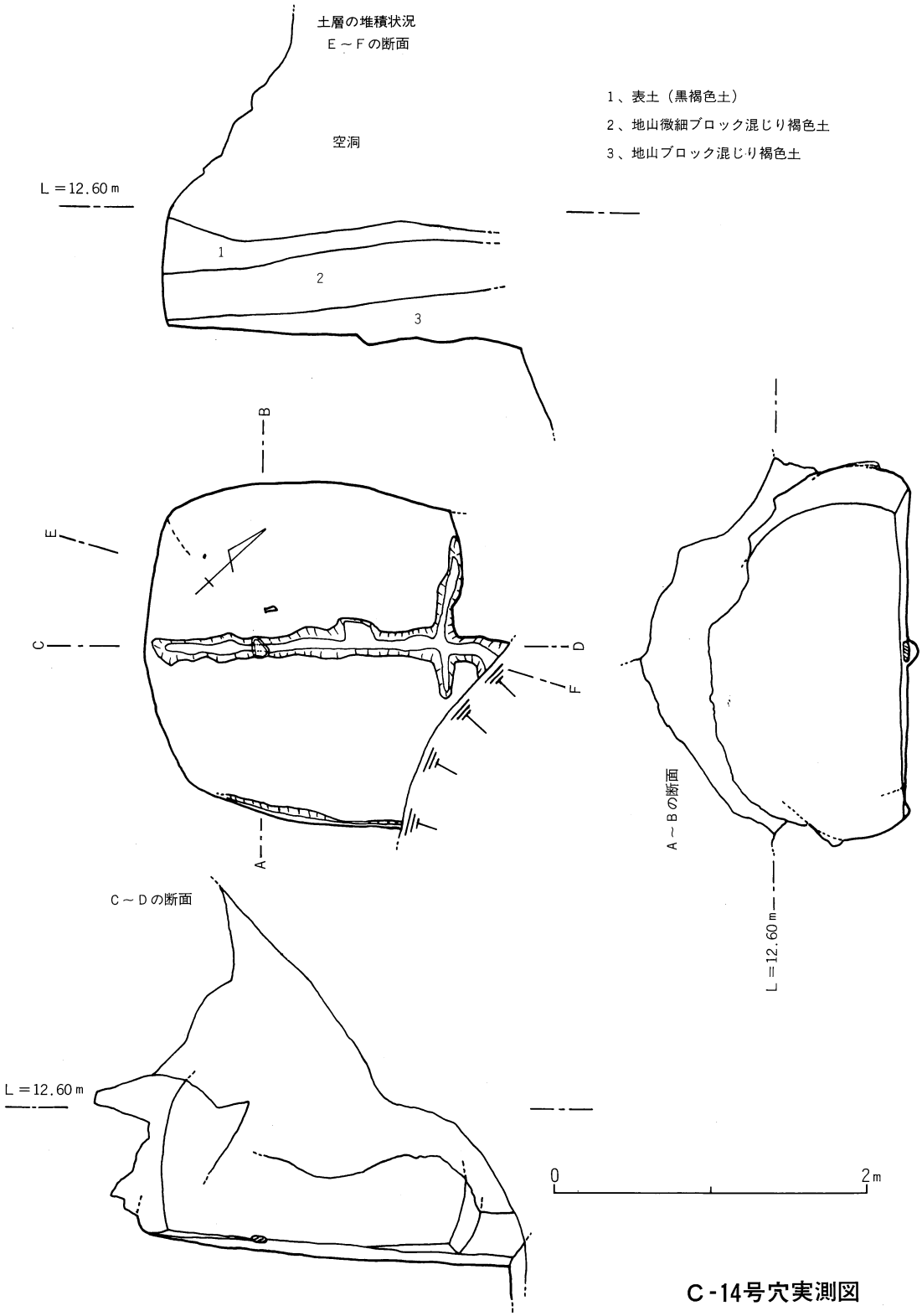
C-14号穴

1　発掘前の樹木伐採の時点で見つかったC-14号穴
（中央の家の屋根の右横）



2　発掘後のC-14号穴
（大部分がなくなっている）

3　中央がC-14号穴。
右上はC-18号穴。


土層の堆積状況
E～Fの断面
空洞
L＝12.60m
1
2
3
1、表土（黒褐色土）
2、地山微細ブロック混じり褐色土
3、地山ブロック混じり褐色土
A
B
C
D
E
F
A～Bの断面
L＝12.60m
C～Dの断面
L＝12.60m
0
2m

C-14号穴実測図

C－15号穴

C-11号穴の南側やや上手にあります。まるで“ウナギの寝床”のように玄室と羨道の区別がつかない特異な平面形をしています。穴の大きさも極端に小さいし、天井と床面の状態も通常の横穴の類型には入りません。「不定形の横穴」ということにしておきます。（このような類は他地域でも時々発掘されます。）閉塞施設も副葬品も全くない貧弱なものです。そういう点から、小児用横穴と考えたらいかがでしょうか。子どもなら十分入れる大きさです。（横穴築造中途で作業を中止したものと考えることもできますが……。）

なお前庭の手前の斜面には人工的に加工した痕跡があります。ちょっと階段状になっているので、墓に通じる「墓道」かもしれません。

古墳時代後期にはちがいありませんが、副葬品がないので細かな時期は判定できません。

C-15号穴観察表

（単位：m）

玄室	標高（床面）	平均 13.76	奥行	2.14	奥幅	0.44	前幅	0.42	最大幅	0.50	高さ	0.78	
	平面形	不定形			天井の形態	不定形			型式				
	埋葬施設	左側			右側				奥				
羨道	長さ		奥幅		前幅		高さ		横断面の形	やや丸味をおびた方形			
閉塞施設	石材	認められない								繰込有無	無		
前庭部	長さ	1.70					幅	0.74					
排水溝	ない。												
その他	玄室と羨道の区別がない。前庭の手前に長さ約3.5メートルほどの「墓道」らしきものがある。												

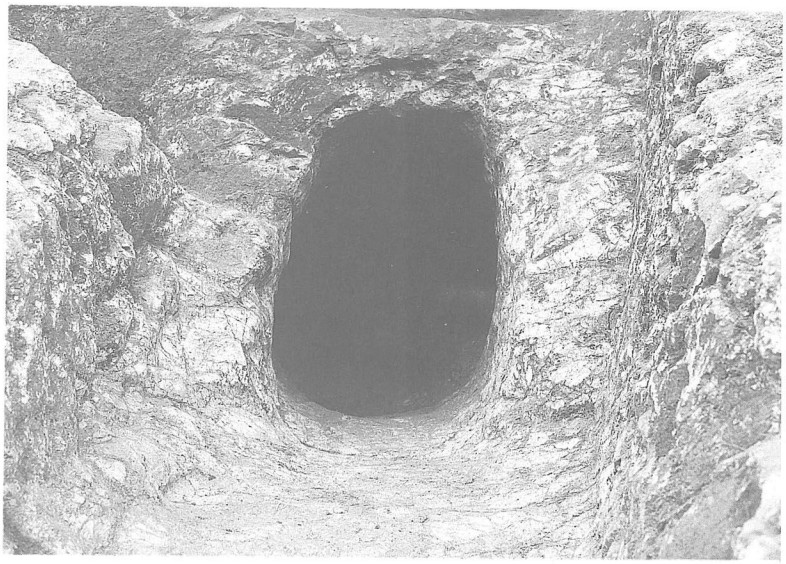
遺物出土位置

玄室	なし
羨道	
前庭	なし
その他	

築造時期および追葬

築造年代	古墳時代後期	須恵器型式	不明	追葬有無	不明	人骨有無	無
備考							

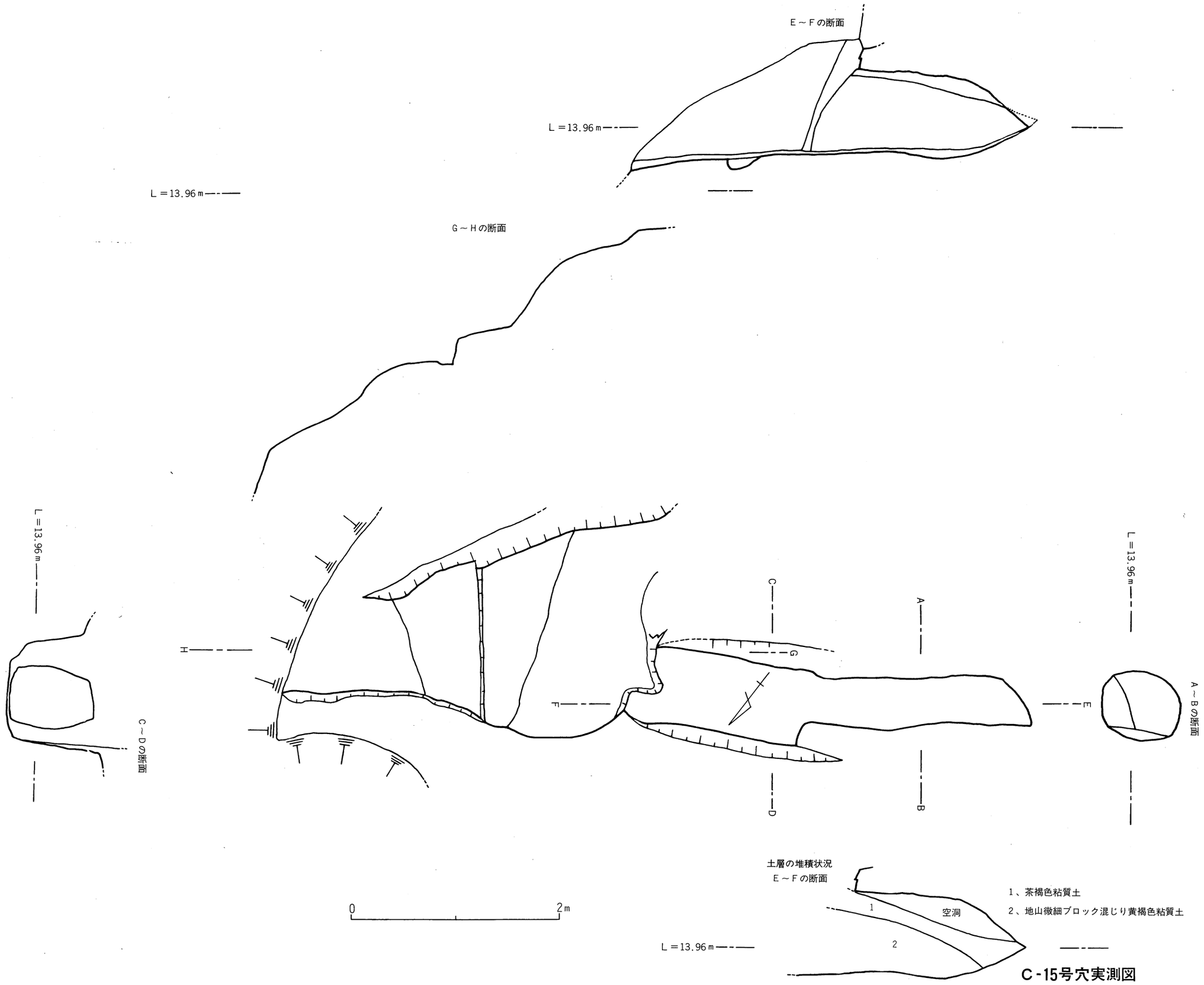
C-15号穴



1　正面(しょうめん)から見(み)たC-15号穴

2　前庭の前に続く墓道(ぼどう)(?)らしきもの

3　右上方のC-15号穴と墓道(ぼどう)(?)
中央はC-12号穴


E～Fの断面
L＝13.96m
L＝13.96m
G～Hの断面
L＝13.96m
C～Dの断面
H
F
C
G
A
E
D
B
L＝13.96m
A～Bの断面
土層の堆積状況
E～Fの断面
1
2
空洞
L＝13.96m
0
2m
1、茶褐色粘質土
2、地山微細ブロック混じり黄褐色粘質土

C-15号穴実測図

C－16号穴

C-12号穴の南側約２メートル上にあります。羨門から前庭にかけて自然石と粘土で完全に密閉されていました。

前庭が大変短いのは、山の斜面の自然傾斜に左右されたと思います。羨道の天井が短いのも同じ理由からでしょう。その点はC-13号穴とよく似ています。

玄室は高さが低くて平面形が台形という点では見劣りしますが、かっちりと軒をとりつけた家形です。軒の形まではっきりさせたのは、宮尾横穴群の中でこの横穴だけです。軒先と棟とを結ぶ「破風」の線もあるので「妻入り四注式」という型式になります。また扁平な大小10個の自然石で石床（遺体をのせるベッド）を設けているのも、この横穴だけです。ただし気になるのはその石床の長さです。約1.3メートルしかありません。ちょっと短か目です。元々閉塞用の石だったのを玄室の中に持ち込んで敷き並べた、という想像もできます。

副葬品の土器から、古墳時代の終わり７世期後半になって築造されたことが考えられます。

C-16号穴観察表

（単位： m）

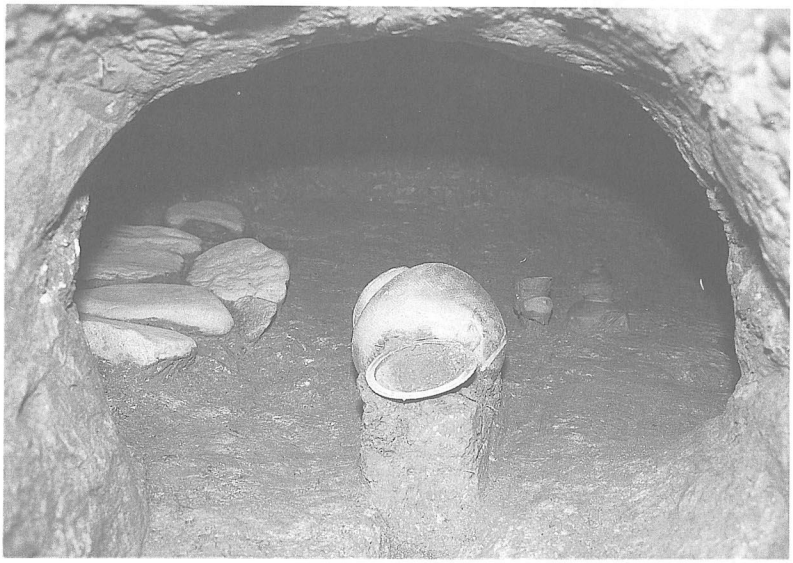
玄室	標高（床面）	平均 14.10	奥行	2.00	奥幅	1.40	前幅	2.05	最大幅	2.14	高さ	1.00
	平面形	台形			天井の形態	家形			型式	妻入り四注式		
	埋葬施設	左側	石床（扁平な自然石10個で）		右側				奥			
羨道	長さ	0.80	奥幅	0.75	前幅	0.48	高さ	0.68	横断面の形	やや丸味をおびた方形		
閉塞施設	石材	自然石37個を積み上げている。海石と地山石の両方を使用。石の大きさは他の横穴に比べて小さ目。								繰込有無	無	
前庭部	長さ	0.50					幅	0.80				
排水溝	玄室奥壁から羨道・前庭に至るまでほぼ中心線の方向に設置。											
その他	前庭は短い。											

遺物出土位置

玄室	坏蓋１個、坏身１個、高坏１個、甕１個、甕１個
羨道	なし
前庭	なし
その他	

C-16号穴

1　扉石の状況

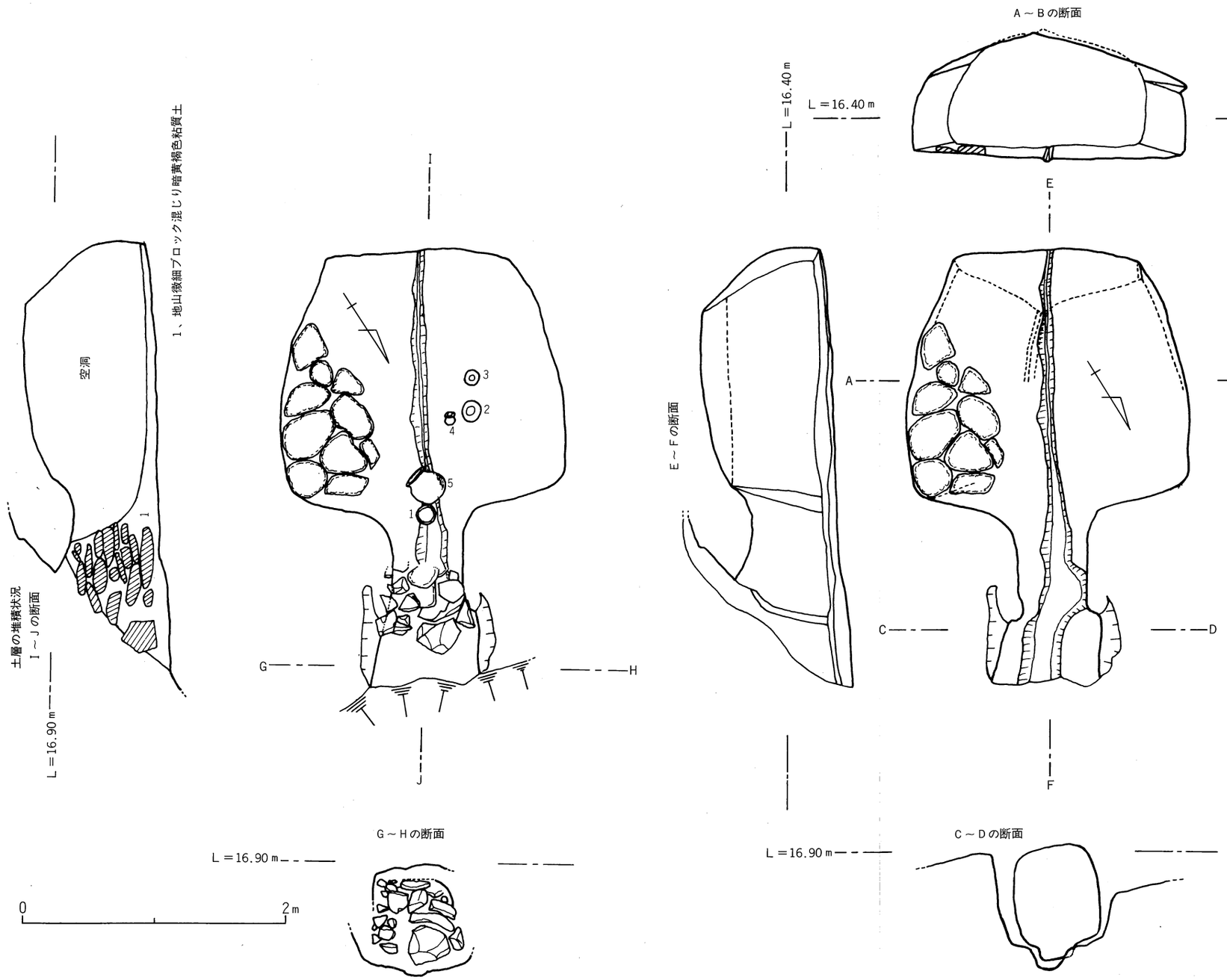


2　C-16号穴の玄室内遺物出土状況（左側は遺体を横たえる石床）

3　中央一番高い位置にあるC-16号穴

右から順に

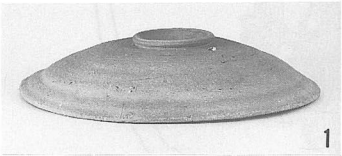
C-10号穴、C-11号穴、C-15号穴、C-12号穴、C-16号穴、C-13号穴、C-18号穴、C-14号穴、


A～Bの断面
L＝16.40ｍ
L＝16.40ｍ
E～Fの断面
空洞
1、地山微細ブロック混じり暗黄褐色粘質土
土層の堆積状況
I～Jの断面
L＝16.90ｍ
G～Hの断面
L＝16.90ｍ
C～Dの断面
L＝16.90ｍ
0
2ｍ

C-16号穴実測図

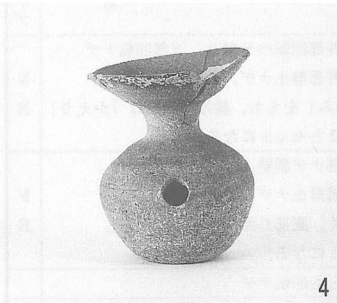
築造時期および追葬

築造年代	古墳時代後期 （7世紀後半）	須恵器型式	Ⅳ期 （E）	追葬有無	不　明	人骨有無	無
備　　考	羨道部天井の先端部はC-13号穴とよく似ている。（落盤していない。）						


1

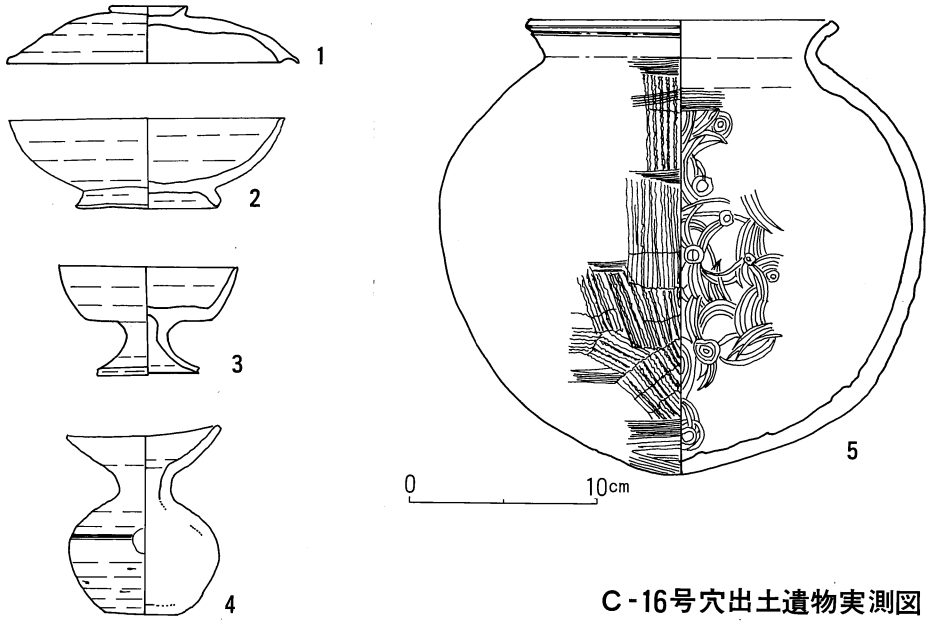
2

3


4

5

C-16号穴出土遺物



C-16号穴出土遺物実測図

C-16号穴出土遺物観察表

番号	取り上げ番号	器種	寸法（cm） 口径	胴径	底径	器高	胎土	焼成	色調	備考	タイプ
1	No. 111	坏蓋	15.4			3.1	密 少量の細砂あり	良好	灰色	外面－天井部回転ヘラ削り、下部回転ナデ 内面－天井部静止ナデ、下部回転ナデ 「輪状つまみ」をもち、縁端部内面は「かえり」がつく。2とセットになる。	Ⅳ E
2	No. 114	坏身	14.4		7.2	4.8	〃	〃	〃	外面－底部ナデ調整、体部回転ナデ 内面－底部静止ナデ、上部回転ナデ 高台がつく。底部外面にヘラ記号「－」。 1とセットになる。	Ⅳ E
3	No. 115	高坏	9.3		5.3	5.8	〃	〃	〃	内外両面とも回転ナデ	
4	No. 113	瑤	7.8	7.8	3.9	9.5	〃	〃	黄灰色	外面－底部ヘラ切り後ナデ調整、胴部以下回転ヘラ削り、上部回転ナデ 内面－回転ナデ 口縁部と底部に若干の自然釉。平底を有する。	
5	No. 112	甕	15.8	25.0		24.1	〃	〃	〃	外面－頸部以下格子状タタキ、頸部以上回転ナデ、口縁近くに一条の沈線 内面－頸部以下青海波文タタキ、頸部以上回転ナデ 焼成時、底部に粘土塊付着。内外両面に自然釉	

C－17号穴

C-14号穴とほぼ同じ高さの南側斜面に掘られています。残念なことに玄室と羨道の天井は落ちていますし、羨門の扉石もかなりくずされ、玄室内も荒されています。玄室の平面形から比較的小形の横穴だということがわかります。わずかに残っている壁の状態や平面がしっかりしている点から、便化家形のタイプが考えられます。扉石の間から出土した須恵器の形式（ⅣE）から、少くとも7世紀後半に使用されていたことはまちがいありません。いつ築造されたかは不明です。

なお、前庭部から鉄製刀子が見つかりましたが、そもそもこれは玄室内の遺体の近くに副葬するものです。ですから、追葬の時点で片付けられたのか、あるいは、盗掘を受けた時、外に捨てられた、という解釈ができます。

C-17号穴観察表

（単位：m）

玄室	標高（床面）	平均 13.60	奥行	1.55	奥幅	1.61	前幅	1.70	最大幅	1.81	高さ	不明
	平面形	正方形			天井の形態	便化家形			型式			
	埋葬施設	左側			右側				奥			
羨道	長さ	0.95	奥幅	0.80	前幅	0.74	高さ	不明	横断面の形	底面はU字形に近い		
閉塞施設	石材	自然石を積み上げている。上部はくずれて下部の17個が残存。								繰込有無	片側のみ有	
前庭部	長さ	1.85					幅	0.75				
排水溝	なし											
その他	前庭は玄室～羨道の中軸線より左へ約20度ずれている。羨門と前庭の間に段差がつく。											

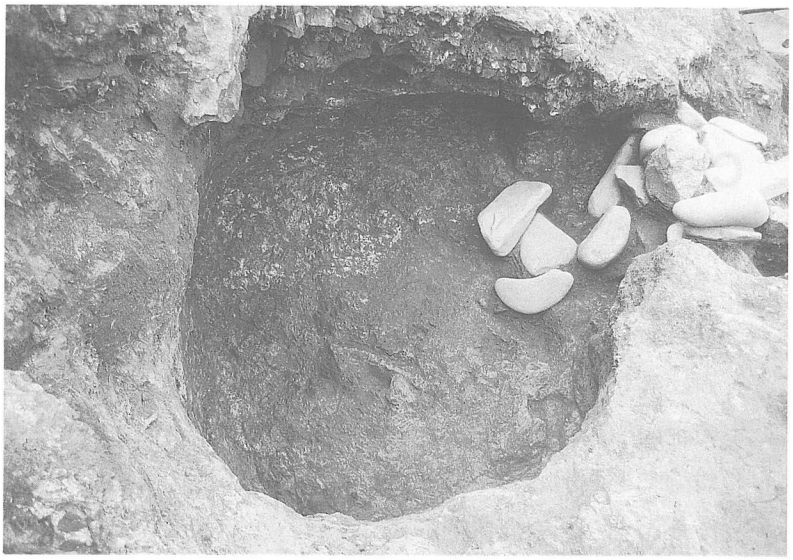
遺物出土位置

玄室	土師器甕破片1個
羨道	坏1個
前庭	鉄製刀子1本
その他	

築造時期および追葬

使用年代	古墳時代後期（7世紀後半）	須恵器型式	Ⅳ期（E）	追葬有無	不明	人骨有無	無
備考	玄室と羨道の天井は落盤。						

C-17号穴



1　落盤して天井のなくなったC-17号穴の玄室と羨道部の状況（羨道部には扉石）

2　正面から見た状況

左どなりはC-19号穴

右どなりはC-21号穴

3　中央がC-17号穴

右はしから

C-14号穴、C-21号穴

C-17号穴、C-19号穴

C-23号穴、